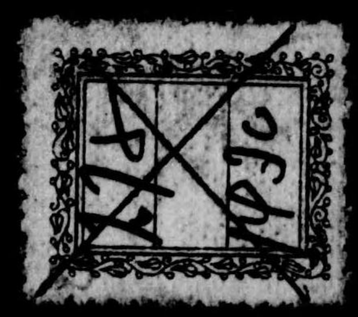
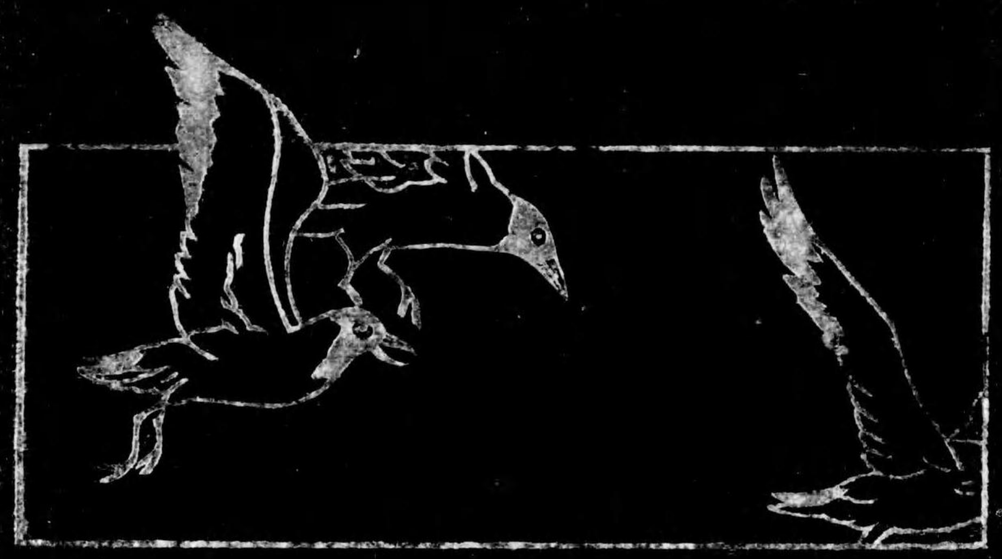
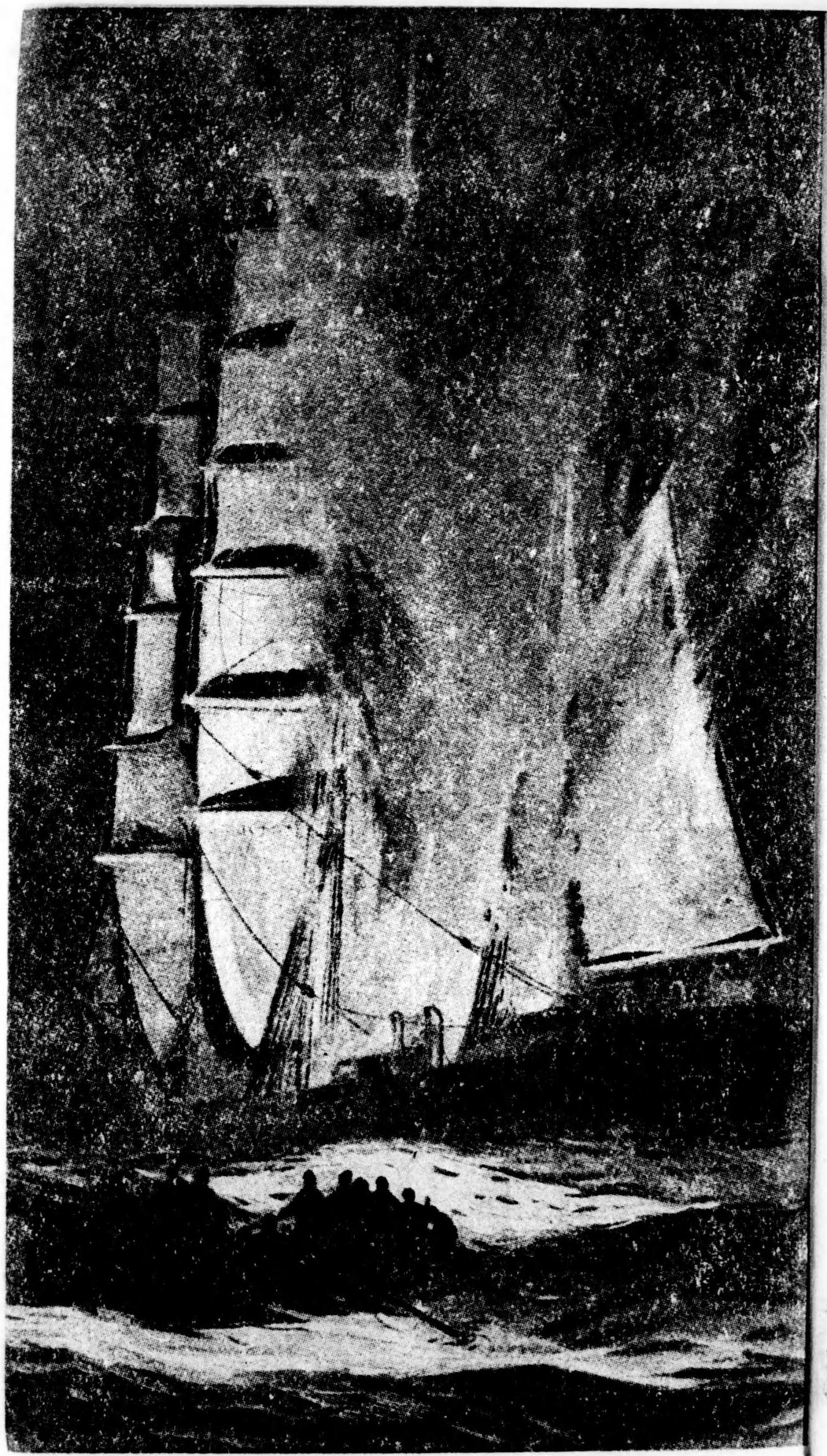
m
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
16 m
70 1 2 3 4





178
1930



特101
151

船と人

朱雀太郎

大正
7. 7. 2
内交

謹んで此書を

近藤廉平君に

捧ぐ

帝國圖書館
51.10.-8
帝國圖書館藏

1086071

題帙　淺倉文夫氏
序文　岩村透氏
著者像　名取春仙氏
口繪　宇和川通喩氏
扉　名取春仙氏
中扉　岡本一平氏

序

『海のロマンス』なる書名は、新聞に出た幾度かの廣告で記憶して居たが、何を書いたものか、誰が書いたものかは、一向注意して居なかつた。今歳の四月、神戸から鹿島丸に乘つて、長崎迄はゴタ〳〵の間に過ぎ、上海に着く迄には、大シケを喰つて、碌々、船中の樣子も解らず、上海出發の翌日頃から段々と、乘組の人々の顏を見知り始めた。

確か、上海と香港の間であつたらうと思ふ。溫厚な八木船長から右舷のプロメナード、デッキで、連夜、金州丸擊沈當時の實況を聞た。賢明な志立夫人、面白い『時事』の對島君（船中略名『新聞』）、熱烈な國粹家、中村平輔君（略名『耳鼻咽喉』）、上海病院の篠崎ドクトル（略名『籤崎』）など、兎に角、平凡を超越し

た十餘人の連中と三日月なりに座を占めて、南清沿岸の、氣まぐれな輪廓をした山々島々を薄あがりに、詠めながら、海波の送り來る暖かい半熱帶の風に、とろつとして傾聽した。其時の氣持は、自分の生命あらん限り、幾度とは無く繰り返して翫味する事であらう。

此集會の後であつた。ある時、船長から、『「海のロマンス」を書いた「アップレンチス」は此船に乘て居る』と聞たが、自分が米窪君を知り始たのは、此時であつた。併し、未だ、どの男が其『アップレンチス』であるかは知らない、

旅の日數の重なるにつれ、船長に始まつた評判は、ドクトルから聞く、運轉士から聞く、事務長から聞く、機關士から聞く、『海のロマンス』、『太刀雄』『アップレンチス』の名稱は、鹿島丸のあらゆる方面から自分を包圍壓迫して、

厭やでも應でも、何でも蚊でも、是非共、此『太刀雄』を知らざるを得なくされた。實際の處、米窪君は、鹿島丸全體の『自慢物』であつて、其人氣の度合に於ては、名古屋人の鯱鉾、京人の金閣寺、江戸ッ子の天麩羅と比べて、更に遜色無く、文學の權威と云ふものも、亦偉らいものであると、今更の如く思ふた。

いつの事であつたか、トウ〳〵此名物を拜觀した。開けつ放した、穢ならしいハッチの口に立て、グワラ〳〵、ごウ〳〵と考慮無く、蠻音を轟かせる其中に、上げ下ろす箱詰袋包種々雜多の重荷の飛び狂ふ間に、身をかわせながら、バビロニアの彫刻のモデルかとも想はるゝ、短かい、頑丈な體軀の壯者が、己が三倍もある印度人を見上げながら、一種、不可思議な英語で指圖する、アノ男が『太刀雄』であると、側の誰かゞ教へて呉れた。此時が『ロマ

ンス』(米窪君の船中符號)の初見物であつた。

米窪君とは、いつ、知り合になつたか、確と覺えん。劍道達人の仕合と同じく、多分、相方、睨み合に、ジリ〳〵接をした事と見える。併し、何時の間にか、出來合となり、とう〳〵短かい倫敦碇泊の間にも、ピカデリーを散歩し、エムパイアを見物し、佛蘭西めし屋に同食すると云ふ程度に迄進んだ。一度、陸に上つては、霧散して仕舞ふ、御定まりの船交際(ふなつきあひ)が、是迄に繫がるゝとは、よく〳〵の緣と見える。

人の一生を考へると、中々に、不思議である。始終、顏をつき合せてる間柄で、幾年經つても、感情の移らぬ人もあれば、五分十分、ちよつちよつと話す斗りの人と、深い知り合となる人もある。アツプレンチスとして、慘酷な程度に迄多忙で、しかも、義務を果す事に於て、更に詩情の容るべき餘地無く見られた米窪君と自分との接觸は、度數こそ多けれ、極めて短かい時間の事であつた。午前二時、毎夜、機械のやうに、キチンと二等喫煙室のニツケル鍍金の時計直しとやつて來る、其歸途の瞬間か、三番ハツチに最後の上は被をかぶせた其後の暫らくの間が、重もに話し合つた時であつた。此忙がしい苦役の間に、此のやうな『船と人』が纏め得らるゝと云ふものは、殆ど人間業とは思はれん。天才でもあらう、素養でもあらう、修練でもあらう、道樂でもあらう、併し、非凡な勤勉が、最も著しい力であるに違ひ無く、此點に於ては、自分は、著者を畏敬すると同時に、羨ましく思ふて居る。

『船と人』は、世間一般の讀者にとつては、海上生活の詩話と報告であり、

我等鹿島丸の船客にとつては、難有い一の記念である。併し、ピエール、ド、クールヴェーンの名句『世の事は理智の人には皆喜劇、情の人には皆悲劇なり』の眞味を味ひ得る者によつては、多大の犠牲を拂ひつゝ、海上生活に從ふ其人々の背後に潜む一種の悲劇を想はせ、熱き同情の念を起さしむるに於て、亦有力なる一の仲介と思ふ。眞の文學の功德は唯々、文學にのみ止まるので無い。社會の何處に迄波及するか、其勞力の範圍は解らん。

淺からぬ因緣ある男として、序文を書けとの命に應じ、其因緣の由來を說き、此書の門出を祝する事如件。

大正三年晩秋

三崎二町谷陣松庵にて

岩村芋洗記

自序

私は此書『船と人』とを以て、前著『海のロマンス』の姉妹篇であると認知せられん事を切望する。

『海のロマンス』を讀んだ私の或友人は、『此男は自己を欺いて居ると云つたさうである。

私は心窃かに、此人は屹度私が其の感受性に於て著しく現實的色彩を欲する心的傾向を有ち乍らも、其文の表現法に於て耽美的趣味に矯められて著しくロマンチックになる事を知らなかつたに相違ない、と思考する。『海のロマンス』は斯の如き私の心理を代表した作である。詩として歌ひ、繪として觀たるメルエスプリの憧憬である。

此の點より觀て『船と人』は、彼とは少しく異るのである。五ヶ月間の鹿島丸上の憐れな哀しい忌むべきマドロス生活は、可憐相な程私の耽美的情藻を

虐げた爲めに、文の表研法に於ても到底自己の趣味より來る技巧（アール）を弄ぶ餘裕が無かつた。そうして夫丈け現實に觸れて居り、夫丈け眞摯な作物であると信ずる。

『船と人』は實に『海に住む人々の現實の暴露』である。『虐げられたる人の眞面目なる哀訴の聲』である。『未だ紹介せられざるマドロス生活を披瀝せる哀史』である。『日々に荒廢して行く弱者の心理の僞らざる告白』である。

私は、『海のロマンス』に於て書き殘した事、書き過した事、一切の私の負擔をこの書に依つて一時に償つたやうに感ずる。

此書を單行本にするに當つて、序を賜つた岩村男爵、跋を贈られた薄井兄、裝幀を御願ひした朝倉文夫氏、口繪を御願ひした名取春仙氏、岡本一平氏、宇和川通喩氏の先輩諸彦に、甚大なる謝意と敬意とを表するのである。

大正三年十月世界周航歸帆記念日　著者識

船と人　目次

一、海に住む人……一
二、黑船物語……五〇
三、スエズを渡りて……二九
四、ロンドンプール……三三
五、白耳義の回顧……二六七
六、戰亂中の航海……三四一
七、此書を捧ぐる理由……三八二
附錄、海を戀する若き船人……薄井秀一

一、海に住む人

1. 救はるべき海の人……二
2. コンパス士官……八
3. 船方の呪詛……一三
4. 汚水とり女……一六
5. 人足と仲仕……一八
6. 楊子江と上海……二三
7. 耳の掃除……四四
8. 海より見たる香港……四六

救はるべき海の人

T兄足下

五ケ月と七日間の樂しいイージィな陸上生活を送つた後、私は再び『船の上の人』となりました。

そこで私は斯う思ひます。私が所謂『船の上の人』となると云ふ事と、私が彼の海と船と人との爲めに敢て見苦しくも其禿びたる筆を執ると云ふ事との間には、多少の連絡も交渉も歸趣も存在すべきであると云つても、夫は強ちに不合理な事ではあるまいと……

私が斯く書いて居りまする狹い机の上には、神田の神保町で買つて來たヴ

イナスの石膏像と、横濱の夜店で買つたゼラニアムの鉢と、伺行の友小川君の所有たる銀の灰皿とがあります。

此三つの品は鹿島丸の船乘の部屋にあつて、しかも船乘らしからぬ色彩を與ふるを以て評判のものであります。かく讀んで來て、あなたは何だ詰らないと笑はるゝかも知れません、併しこれだけでも如何に船乘生活が乾燥で枯淡で沒趣味なるかを推定する事が出來るでせう。

『日本の陸人』が未だ少しも――敢て少しもと云ひます――知らない海上の世界には、多くの悲劇があります。自覺せざる卑下と屈辱と無智の生活があります。そこには『虐げられつゝある多くの人々』があります。そこには『侮られ卑しめられ忘れられつゝある多くの階級』があります。そこには『救はる

べき多くのマドロス』があります。そこには『新に行はるべき多くの社會政策』があります。そこには『極端に働いて極端に酬いられざる階級』があります

斯くして私は海と、船と、人との爲めに書きたいのです。

私の書かんとする海には私の未だ見ざる南支那海があります。雪嶺の下深く碧波を湛へて、多くの才子佳人の客死を呪つたベンガルの灣があります。熱砂遠くナザレの聖地に連る亞剌比亞の原があります。希臘と羅馬の神話を育みし地中海があります。奇しき想像の源泉地としてのドバーの海峽があります。

私の述べんとする船には東洋一の巨社たる日本郵船の諸船があります。碧き海より帆と神祕とロマンスとを追つ拂つた憎き汽船があります。海神の權

威を蔑にし。風伯の勢理を風馬牛するサタン黑船があります。幾十百の異りたる個性と、世界と、人間とを、單に一種の貨物として、何等遠慮する事なく、何等顧慮する處なく冷やかに甲地よりして乙地へと運び去る汽船があります。

私の誌さんとする人々には過勞と、睡眠の不足と、不平と、屈辱と、懊惱と、不快とに煩悶するマドロスが有ります。未だ體現せられざる新社會政策を翹望して、而も未だ獲られざる海の男があります。故なく侮蔑され、故なく虐げられ、訴ふるに道なく、叫ばんとするも口なき隱れたる海上の努力者があります。千秋一日の如く不眠不休に動いて、而かも病褥にある親父を見舞ふの時間をさへ有せざる憐むべき舵取があります。晝は荷役に、夜は當直

勤務に、無常迅速と過ぎ去る青春享樂の瞬時を暗き夜の世界と碧き海の上とに送る運轉士があります。ダムピロの裡に、ビルジの中に、日の目を厭ふ土龍の如くに、啓示も、憧憬も、感嘆も、興趣もなく、たゞ死に急ぐが爲めに生きるが如き沖積仲仕やビルジ掃除女などがあります。

此等の人々は海の上船の中でなくては見られぬ人々であります。此等の人々は海の上船の中でなくては生きて行く事の出來ぬ人々であります。

想像も及ばざる過勞と、心配と、困苦と、屈辱との世界に蠢ける人々を見るとき、我儘にして太平なる陸人は今更に驚異の眼を睜るでありませう。

先年私はかの『海のロマンス』――大成丸世界周航記――を書いて數知らぬ非難と、心苦しさとを感じました。

あんなものはモウ二度と書くなと云ふ者もありました。あれを書いて貴樣は大分罪を造つたと云ふ友達もありました。聞いて見るとあの爲にアツタラ有望な青年が船乘になり下つたものが少くないとの事です。

さりとは氣の毒な次第です。己か純なる趣味性から海を謳歌したのが、謬つて多くの陸人に災したとは以ての外の次第であります。

併し乍ら船乘とならなくては、充分に海洋美を鑑賞しメル、エスプリを享受出來ないとは傷ましい事實であります。

やがてマドロスとしての其主觀より海との交渉、接觸を吟味するとき、以前の海に對する憧憬的趣味が徐々とその霞のやうな薄幕を剝いで、露骨に變つて來るのを發見するのは人生の慘事ではありませんか?。

かくして所謂『わが造りし罪』を亡ぼすべく、かつは『海の世界にある慘事』を世に紹介すべく、しかも『救はるべき人々の味方』たるべく私は再び臆面もなく玆に現れたわけであります。

終りに臨んで、私は私の最も親しき陸人たる貴下の健康を祈る積りであります。

コンパス士官

航海科實習學生　何　某

日本郵船株式會社汽船鹿島丸へ乗組を命ず

但し某月某日横濱に於て同社支店を經て乗船すべし

大正三年某月某日

商船學校

自分は今此命令書を前にして靜かに考へて居る。西向きの船窓からさし入る光線の縞を横切つて、細かい埃が輕く又輕く机の上に墮ちて來る。

往昔ルーテルは羅馬法王の濫發した免罪符を見て『これ軈て吾運命を決すべき通告である』と叫んだと云ふ、この偉大なる宗教改革者の顰に倣へば、この見窄らしい一片の辭令書こそ『これ軈て來るべき吾六箇月の運名を支配すべき通告』であらねばならぬ。

幇間は扇子で額を叩くべく、小判戴きは鰻の頭に吸つくべく、鳶は小僧の油揚を攫ふべく生れて來たがも知らむ。されば船乗は船に乗るべく生れて來たのであらうか?!

貴殿爲運轉士生徒、鹿島丸乗組被命候條、本船へ御乗組此書面船長へ御

指示の上乘船當日より月手當七圓及歐洲航路手當一ヶ月金七圓本船に於て可被成御受此段……

自分は今此俸級令を前にして更に又考へる。輕く墮ちて來る埃は薄く机の上につもる。

往昔パウロはコリンタ前書に誌して『爾等知らずや馳場に趨る者は皆趨れ共、褒美を獲るものは唯一人なるを、爾等も亦獲むが爲めに趨るべし』と。

かくしてパウロは趨つて褒美を獲た。褒美は信と靈と道とに生き得る正覺妙諦の至境であつた。かくして英國民は趨つて大憲章を獲た。かくしてダンテは神曲物語に趨り、綠兒は乳房に急ぎ、女は臙脂粉黛に趨り、老夫は珠數と棺桶とに急ぐ。みな夫々の褒美を獲んが爲に……。

かくして船乘となるべく趨つた自分は料らずも金十四圓の褒美に有り附いた。

これと云ふのもみなパウロの御蔭である。

柳行李一つにボール箱一つの手輕な旅裝を狹苦しい運轉士生徒室の前に解いたとき、自分は忽ち『新規のコムパス士官が……』と云ふ呟を後ろ耳に捉へた。

成程自分の正帽には學校の羅針章がつゐて居る。

狹苦しい汚ない部屋を見て自分の心は急に暗くなつた。ガタ〳〵と頭の眞上で動く揚貨機の聲を聞いて自分は急な情なくなつた。無智の人足の罵り喚く下品な言葉、樣子の分らぬ巨船の裡を忙しさうに馳せ交ふ色々の階級の人

影、末端神經を極度に刺激する機械の軋む聲、呻き聲等凡ての異なりたる環象のたゞ中にたゞ一人寂しく投入せるとき、自分は急に心細くなつた。

今日から、今から直ぐ、かゝる野獸性の雰圍氣の裡で、かゝる啓示も、感興も情藻もない輩を相手に、乾き切つた生活を始めるのかと思つたら、飛んだ褒美を與へられたものだと、パウロが急に恨めしくなつた。

これと云ふのもみなパウロの御蔭である。

船方の呪咀

『板一枚下は地獄である』

彼等の頭腦には斯う云ふ觀念が有る。

『自分等はより多く働き、より多く動いて、而もより多く疲れる、より多く侮られ、より多く虐げられる』

彼等の頭腦には斯う云ふ觀念が先天的に跳梁して居る。

そこで船方は氣が荒くなる。思想は享樂的となり、欲求は物質的となり、情操は衝動的となり、理性は遂に非靈的となる。從つて彼等は暢氣さうに見ゆる『陸人』に對して一種の僻みを有つ。

機會さへ有れば彌次つてやらう、一泡吹かせてやらうと待ち構へて居る。

吹かせらるゝ者こそ災難である。

三月二十五日、鹿島丸に乘船して、船員としての雇傭契約手續きの爲め海務所に出頭しての歸るさである。

萬國橋の傍から艀船を雇ふ。幾何だと云へば一人二十錢宛だと云ふ。新參のコンパス士官と見て、直ぐに嘗めにかゝる。初めの一人が二十錢で、後は皆一人十錢宛の規定だらうと詰れば、やれ夜の間だからとか、やれ「鹿島」は沖がゝりだからとか盛んに威嚇する。

話に聞けば先日、『大正博』で上京旁わざ〳〵濱下りまで汽船見物に來た田舍者を、巨な船を見せてやるからとて、棧橋や岸壁には『東洋汽船』や『ジャーマンメイル』や『フレンチメイル』の立派な船が澤山纜つて居るのに拘らず、艀船賃と案内料合せて一人一圓宛奪つた上、無法にも斷りなしに僕等の船に追ひ上げたまゝ逃げて歸つた不届者もあつたと云ふ。

彼等の『陸人』に對する示威運動は此等の不當なる艀賃の强要のみならで、

其威嚇的效果は癪に觸る程ぞんざいな罵語によつて見出される。

『ヤイ、コン畜生、よつくも俺の船に水を蹴とばしたな、歸つて來て見ろ！文句は言はさず踏み殺してやるから』。などと云ふ物騒な會話が平氣で取り交はされる。

敏感なる人間は、かゝる間接的示威運動が、强迫起念を惹起する上に於て、大なる效果を生ずるものとして大に恐れる。

而かもこんな恐ろしい喙呵が、まだ『鐵砲玉』と『飴ん棒』とを友達として居る如な、十四か五位の鼻垂れ小僧の小さな口から傍若無人に吐出されるのを見たならば、陸と人とに對する彼等の呪咀の如何に根强きものなるかを知るであらう。

汚水とり女

歐洲航路の船が一往復航を濟して横濱に還ると、凡ての揚荷を終つた後乾度船渠に入つて修繕や檢査をやる。此時船の艙水の掃除に來るのが所謂「汚水とり女」である。

これは或意味に於て葛西の百姓よりも穢ない職業である。艙水は或る意味に於て糞尿よりも汚ない。此穢ない仕事を、腹掛けに股引、法被に褌等の奇怪なる姿の醜い多くの女が、卑しげなる戯言を言ひ交はし乍ら、事もなげに片付けて行く有樣は世にも不思議な觀物である。

何事をか打興じ乍ら姦しく打ち罵る彼等の悍聲、男のやうに素ばしこく仕

遂げて了ふ其の怖ろしき力業等を眼のあたり近く眺めては、嗜とか、含羞とか、靜肅とか、優美とか、婉曲とか云ふ女の有すべき凡ての性的特徴を缺除せる、一種中性の複細胞動物と云ふても更に間違ひはなさ相である。

『メッツヤン、あんたはウチを持つて居るか』

凡ての話が斯れである。

『有つて居るよ。』

『何處に』

『東京に』

『お神さんがヤキモキして待つて居るだに、仕事を止く止めさつせ……』

などと四時の仕事止めを三時半頃から强請つて居るのは、まだしも温順し

い要求であると言はねばならぬ。

僕が面を背けて、耳と、口と、鼻と、凡ての入口を塞ぐが如く辟易すると

きは、卽ち彼等の鄙言猥語が時を得顏に跳梁する時である。

人足と仲仕

人足、仲仕、艀船頭等は水と陸との間にあつて、船乘と陸人との間に介在し、

其處に生活の業を見出して行く人々である。

單に其生活方法が多くの危險を伴ふと云ふ意味から、船乘を最も男らしい

生業であると承認する事が出來るならば、毎日のやうに一人二人の死人や怪

我人を算へ得る仲仕業や人足業は、又船乘に劣らぬ程に男らしい職業であら

ねばならぬ。

私は横濱に碇泊中、自分の分擔ちの船艙に墮ちて卽死した一人の人足の檢

視に立ち會つた。そして如何にも無雜作な其の『生の棄てやう』を眼前に眺

めた。

其は春にも似ず寒い雪が、海を罩め船を罩めてひた降りに降る日であつた。

東京から雪を冒して歸船した私は、六番船艙の艙口の上に石臘細工のやうな

冷めたい死骸を取り圍む多くの人々の暗い影を見た、聞けば彼は荷役が既に

終つた後、中甲板のハッチの上を歩き廻つて居る中に、折惡く艙口蓋の嵌つ

て居らぬ口から艙底に墮ち込んだのであると。

つい二時間許り前までは彼が動かしたデリックによつて、彼の冷めたい殘

骸が艀船に卸さるゝ時、私はこの隱れたる海上の努力者、同時に悲しむべき虐待と、屈辱と、侮蔑との犧牲者たる彼に向つて最後の默禮を與へたのである。而して死せる彼を生き殘れる彼の同輩に較べて果して何れが幸福なるべきかを考へた。

仲仕は之を大別して『沖積仲仕』と『陸揚仲仕』とするのであるが、沖積仲仕を定業とする者で『繰荷方』として働く者は割合に鮮く、彼等の多くは此等の『繰荷方』に使つて行く頭とか小頭とか云ふものである。楊貨機を動かすウインチマンとかウィチマンに合圖するフホーアマンとか云ふ者が即ち其であつて船艙の中で繰荷をする人足は單に一時的の浮浪者の群で有る。

此等の凡ての上には、神戸港の如く棧橋會社などと稱へて一種の組合組織

になつて居るものを除いては、仲仕の親分なる者が有つて、廻漕問屋より來る『仲仕賃の頭』を刎ねて收入として居る者がある。仲仕や人足の氣質や、積荷の巧拙などから論つても、横濱、神戸、長崎とみなそれ〴〵異つた色彩がある。

積荷方法は上手であるが、氣風の最も荒いのは横濱である。繰荷の時に人足の懸け聲の旋律が最も音樂的なのも亦横濱である。『もう一つ……エ――ンヤ――ラ……』と、手鍵を荷物の背に刺し乍ら、至極簡單にして而も情緒的なる合奏の階音に誘導せんとする『音頭取り』の聲音の如何に其朗かなる！

船が横濱に居つたとき、私はこの簡單にして而も極めて耳に快き旋律の順列を身に近く聞いて、惚々として暫くは埃だらけの艙底に立つて居ること

を忘れた事が度々あつた。

神戸の仲仕と人足は神戸棧橋會社と稱する一の組合に屬することゝて、多少の秩序と階級と順序とを其仕事の間に認める事が出來る。從つて其訓練は稍組織的で仕事の敏速にしてキビ〳〵せることは實に東洋一と云はれて居る

夜徹しで荷役する時、帽子に三條の白線をつけたフホーアマンが提灯を振り振りウインチマンを指揮する所は、一寸軍隊的で勇ましいものである。從つて人足の如きに至るまで立ちん坊や浮浪者等の間に合せ者は尠く、上下の間にも一條の紀律が有つて、午食の時の如きも、中央の床几に倚れる頭を中心に一同圓形を作つて樂げに『短き幸福の時間』を味はつて居る圖などが見られる。

今神戸で頭をして居る男に『美濃』と綽名せられてゐる若い漢がある。此漢は日露戰役に輕重兵で出征し殊勳を現して金鵄勳章を貰つた美濃生れの者で、行く〳〵は船積み船卸等一切の荷役の方法は凡て船の方では手を出さずに彼等仲仕に任せるやうにせねばならぬといふ主義を抱懷してゐる。

長崎の仲仕は擧動が緩慢悠長で、殊に積付法が拙劣である。併し長崎女の石炭操りは例の評判の門司にも優る位であると云はれて居る。

楊子江と上海

此拙き印象記を十年の昔、純にして粗なりし吾柔かき頭腦に、好奇的欲求と、傳說的想像と、耽美的情操との蒟茎を種附け給ひし吾が老いたる地理と歷史との師の君に參らす。

（一）

楊子江の河口にある吳淞から南東七十海里許りの沖合に北馬鞍島と云ふ島嶼があります。

此島が涼しい夏の海の上に低く紫色に匂つて居るのを、遠く船の上から眺める頃から附近の海の色に怪異な變化が起ります。

この一寸見ては山崩れがした時の河水のやうに、漾々として赤土色に濁り徠り濁り阻る海の氣色を見て、誰か直ぐ此が音に聞ゆるあの楊子江の朝貢だと悟る事が出來ませう。

恐らく曾ては、支那海の脈搏は長江を溯つて直に九江邊に迄影響するか、四五千噸型の汽船は極めて容易に漢江迄も遡航することが出來るとか色

々の例證を列擧されて、遂には、はかの『大江西來自巴蜀、直下萬里澆吳楚』の吳萊の詩まで引例されて、如何にその江の廣大にして無邊なるかを知らしめやうと試みられたあなた方にも、到底十分に想像することが不可能である程に廣大にして無邊なる景色であります。果して楊子江は聞きしに優る力ある江であつたのであります。

斯くして驚異の眼を大きく瞪いた私は、更に船が吳淞近く進んだ時、噂に聞いたよりも案外狹い河幅を見て再び驚きました。

楊子江の河口には崇明島と云ふ三角洲が有ります。此三角洲によつて南北に分派る〻長江の本流と支流とを合せて其河幅は十海里を超えないのですから、一葉輕舟傲煙雨と歌つた支那人は矢張り法螺吹であります。

世の中には寡しく語り、多く印象する奥床しい人があります。楊子江は恰度斯う云ふ人と同じであります。

此洪水のやうな江をチャプ〳〵と赤く汚く蹴ちらし乍ら呉淞に着いた船は、楊子江の一支流黄浦江を十三海浬が程遡つて上海に着くのでありますが、此黄浦江の両岸は、三度私を驚かした程に實に好い景色であります。

今中清の天地は満目たゞ新緑に醉ひ薫風に咽ぶ初夏の季節です。私の船は黄浦江の入口で、太陽と波模様とか、五色の横縞とか、色々の怪しげな旗を掲げた中華民國軍艦に色代し乍ら、赤く濁つた河を慕地に遡つて行きます。而して其處に――赤く醜い江の両岸に、南宋畫に出て來るやうな丸屋根の小さい家や、ラグセイルを有つたジャンクや、緩やかに浪うち乍ら迫々として

續く長閑な青い野や畠や丘陵や、とんまな悠長な挽車の上で初夏の風に吹かれて行く村人等の、如何にも無爲なる景象が展開されて行くのを見出します。

千里鶯啼綠映紅　水村山廓酒旗風　南朝四百八十寺　多少樓臺煙雨中。

とこの景色を歌つた杜牧は流石に詩人であります。

（二）

先生、私はこの上海の地に參りまして、端なくも強い愛憎の念に咽せ返りました。そは上海と云ふ醜い混血兒町を憎むと云ふ懐ひと、憫れにも愚な支那人と云ふ國民を愛すると云ふ懐ひとで有ります。

上海と云ふ港は御承知の通り、例の黄浦江に跨つて居る河川港ですから、此港に出入する船は常に汐の干満に甚大の注意を拂はねばなりません。

干満差が實に二十二三呎もある上に、更に落潮の速力は極めて迅勁であります。から、孰の船も入港すると直ぐ船首を下流に向け直して、直ぐに船首と船尾からは二本宛の鐵條索を浮標に導き、緊乎と動かぬやうに繫止するのです。

此等の仕事はみな『水上の苦力』たる支那の人足がするのですが、その苦力の所作に『自覺せぬ滑稽』が見られます。罪のない鈍い動作が現れます。衒氣とか、體裁とか、虚榮とか、自矜とか、凡ての文明的惡思潮の感化から超越した愛すべき『愚直』さが現れて來ます。

一例を申しますれば、彼等人足の操る艀船は實に奇怪なものであります。全長に比して、其幅が割合に廣い小船は、艫のところが鴛鴦の尻毛のやうに

ピンと跳ね上つて、しかもその逸緒は世にも恐ろしく長いものですから、悠長な散切頭の船頭が閑々として櫓を潛るやうにして船を行る圖は、どうしても鳥居の下で深川踊りをやる梅坊主とさら思はれません此梅坊主と向き合て一人の男が屹度例の長煙管で太平に煙を吹いて居ります。閑々として櫓を操る梅坊主とは、全く別の壺中の天地に住んで居るやうに、太平に煙を吹いて居ります。さうして、汽船の上で如何に怒鳴らうが如何に叱らうが、または如何に焦ぜらうかビクともせずに、納まりり返つて居る度胸には誰でも敬服せずには居られません。

彼等は見得坊に働く國民では有りません。彼等は此頃の人の能くする敵本主義と云ふやうな事をも知らぬ民です、彼等は人は阿諛る事も、人を怒らせる

事も、人を喜ばす事も、人を笑はす事も知りません利己的努力とか、自尊心とか、心的發奮とか云ふ事は彼等に取つて零であります。彼等は凡ての刺激と、賞揚と、貶下と、屈辱と、輕侮とから超越した民であります。

されば彼等を對手にしては、春光遲々たる氣分と、『明日も明後日もある』と云ふ了簡を懷抱いて、無定見に進み、無理想に動かねばなりません。急進とか向上とか刷新とか云ふ事は、彼等に對しては至極の禁物で有ります。

面白いでは有りませんか、帝國主義とか、耽美主義とか、理想派とか、未來派とか、恐ろしい酸化的思潮の多い現世に、此樣な中和せる心持を有ち得るとは！面白いでは有りませんか。英國人に飽き、ヤンキーズムに飽き、文明人に飽き、ゼントルマンに飽き、そうして日本人に飽いた私は、この汚

い無邪氣な支那人が好きであります。

しかも白狼は山西、陝西、四川の諸州を跳梁し、草賊匪徒は湖南雲南に擾亂し、上には袁狡爺の苛政誅求があつて、國運は累卵の如く危い、中華民國唯一の商港の一端に、かういふ空氣が漂つて居ると云ふに至つて、私の恐悅は其最上格に達します。

（三）

『ウラーシンダ、ショーラデイ』と旋律も面白く聲を昂めて來て、忽ち『アヲダ』と中音に轉換の音節に移り、頓て『エイチダ、ヘイチ、アーハー』と順次になだらかな第二低音に滑つて行きます。

これは私が頗る氣に入つた中華民國の『苦力さん』が船艙で繰荷をする

時の懸け聲であります。彼等の所作は相變らず悠長であります。彼等のムードは、かの暢氣極まる太平の懸け聲に體現せられて居ます。

艀船からデリックへ、デリックから船艙へと移さるゝ重い巨きい面倒臭い色々の荷物を一々船の士官の命ずる儘に、而も比類のない從順を以て、隅から隅へと積込み積み擧ぐる有樣は、實に不思議な現象で有ります。

彼等はたゞ言話を言ひ、空氣を呑吐する一種の機械であります。啓示もなく、感興もなく、刺激もなく、憧憬もなく、理智は鈍り、情藻は涸れ、たゞ無爲に動き無爲に休止る彼等の心は一切が空虛であります。彼等には無意義に無方針に、漫然と、世に生れて來たその生き甲斐のない一生を悔むの念もなく、一日々々を兎も角も平安に送つて行くと云ふ事實に滿足し飽和せる念

も有ません。

船の荷役に關係する勞働者は大凡之を三種に分つことが出來ます。それは帳付けと、沖積仲仕と、人足とで、帳付けとは貨物が艀船から本船へ移さる際、起重機の『一と吊』毎にその數をとる役目で、多くは其土地の支店の傭員と爲つて居ります。從つて最も體裁の好い扮裝をして、最もブラ〳〵して居るのが彼等でし。英語も相當に話し、其言動には殊勝にも『馬鹿にされまい』と云ふ努力が少しは見えます。

『ステバドワー』とは士官の命令を聞いて船積み船卸の場所方法等一切の指圖を人足に傳へる頭分の者で有ります。支那の人足はよく言ふ事を聞くと人々の言ふのは、此『頭役』の權威の强いのを言ふのです。

人足と雖も一體に北清地方よりも少しは清潔で、腹も露はに襤褸をぶら下げるやうな汚さもなく、衣服の縫ひ目に集かる半風子を旨さうに食ふやうな勇氣ある者も見受けません。十二時半ともなれば、彼等にも流石に幸福な時が參ります。それは晝飯の時刻で、巨きなお櫃を中心にして艀船の上に長閑な樂しさうな食事が五六箇所に始まります。此時帳付けと沖積仲仕とは別の食卓に着きます。一汁一菜とは簡易生活の標準だと思ひますが、彼等の食事は一汁二菜です。雪のやうに白い飯からは旨さうな湯氣が立ち上つて居ます その食事の内容に於て割合に贅澤な彼等は食事の時間に於ても亦贅澤であります。

彼等は常に一時間よりも少く憩んだことは有りません。

（四）

月のまだ上らない江の面はたゞドンヨリと重々しくうち沈んで、時々碇泊汽船の船窓から洩れて來る燈火に映し出された所のみ、ヌラ〳〵と粘液性に光つて居る黄浦江の中流に、私共のシャムパンは浮び出たのであります。弧形體に高の彎曲した苫の中から竊に私は船頭の所作を偵いました。

ギー〳〵といやな櫓の音を波に響かし乍ら、例の奇怪な逸緒を操る船頭は、思ひなしか隨分と惡相に見えます。其は……

『まあ折角要心してゆき給へ……イーヤ笑談なんぞ言ふものか！上陸した儘行衛不明になつたり、財布と衣服と生命とを奪はれた骸が、ポンヤリ艀に載つて居つたりした事が度々あるからね』

など〻上陸の際士官連から嚇されたのを、私は思ひ出したからであります。

『其樣な馬鹿な事があるものか?!三人と一人じやないか』と景氣よく笑つて來た。V機關士も、ジッと考え込んで居る所を見ると少しは氣味がわるいのでしやう。

反の○君は『何、酒にさへ醉はなければ大丈夫だ』と眞面目に元氣をつけたりしました。

私共三人が此危險極まる『上海の夜の上陸』を試みた最初に於て、私はこの溫血兒町上海が印象する『面憎き心の壓迫』を腹立たしく思ひました。

シャンパンが埠頭近くなつたとき、颯と吹き出した陸の風は、私の目と耳と鼻と口腔とに少からぬ砂塵を塡めて行きました。いやな上海、憎つたらしい上海、いけすかない上海の町と私は思ひました。

紅塵萬丈と云ふ形容詞のみは萬更の法螺ではないと私に思はせた程に、埃の多い巷路を電車道に出やうとする圖端に、私は、數十の猛犬が一度に咆え出したやうな喧聲騷音を耳近く聞きました。

其は支那の勞働者の喧嘩でありました。よくもあの野呂間な悠長な支那人に此眞似が出來る事だと疑はる〻程に、潑溂たる騷ぎ振であります。私は此もかの卑むべき混血兒町のさせる業で、わが愛すべきお人好しの支那の民には罪がないのだと思ひました。

電車に乘りました。驚いたのは、其三分の一位に區劃られた頭等（一等）席に一人の支那人も居らなかつた事であります。そうして他の並等席には一

人の日本人も西洋人も居らなかつた事であります。

一つの區劃を境界に二つの全く異つた世界を載せた混血兒車が、混血兒町の上を得意らしく走つて居る圖は誠に奇妙な景色であります。

アスター通りで電車を捨てた私共は、Y機關士の東道で、日本租界から南京ロードへ、南京ロードから泗馮樓へと支那挽俥を走らせました。

車輪の小さい、箱の低い、轅の素的に長い一種異相な其挽俥は、黒く汗ばんだ汚い腹と股とが上衣と猿股から食み出さした苦力によつて挽かれるのです。

鞭髪を長く風に靡かす支邦人、黒面黄髯に紅いタバーンを卷いた印度人、白い裕衣に赤い帶の日本の娘、白い制服にヘルメット帽の西洋の海軍士官等

が、皆此支那式輕俥で意氣揚々と、この憎むべき混血兒町の騒がしき場面を飾る役者のやうに徂徠して居るのであります。

（五）

紅く光り青く消める仁丹の巨きな廣告、『笹の雪』『菊水』『月廼屋』等ど記された待合の軒燈、夜目にも立派な本願寺別院のゴシック式石造家屋、日本人の呉服店、日本の書籍店、日本切手の郵段局等が、此卑しき居留地街に割據占位する日本の權威と勢力とを見ずやと云ふやうに畔底に落ちて來ます。

南京ロードは流石に上海一の大通りだけあつて、宏爽なる輪奐が軒比檐列して居りました。

泗馮樓と云ふ所は實に怕しい所です。これを淺草を比せんに餘りに靜寂に、

是に千日前を喩せんに餘りに貧弱に、是にオビドールを譬へんに餘りに上品であります。

ピカデリーと云ひ、ブロードウエイと云ひ、某街と云ひ、何通りと數へ來ると、到底これ以上の、雜沓と、人いきれと、燈火と、酒池と、肉林と、さんざめきと、痴態と、放樂とを想像する事が出來ないでせう。

此色街ではデイレンタンチズムとは既に生暖い言葉であります。快樂主義とは時代遲れの所說であります。

見渡せば、廣い二階附のベランダを有つた二層三層の大厦高樓が目も迥に遠く連つて、マイカやステインドグラスの多角形の凸窓に紅綠とり〴〵の賑かな夜の燈火が映つて居る圖こそ、眞に不夜城とも青樓とも華街とも云ふの

でせう。

此見る人の頭腦にたゞ苛々した興奮的刺激的起念を與ふる夜景の外に、尙胡片とか蛇皮線とか簫とか云ふ、『鋭い旋律の絃樂』が、更に苛々せしむるやうに、氣持わるく私共の鼓膜に響いて來ます。

これが卽ち上海に有名な泗馮樓の華街の風情なのです。

此青樓の二階の景色こそ實に前代未聞の一大パノラマであります。

卑しき肉の衝動に飢たる男が、物々しき妓女の髮の臭と、濛々と怪しく立ち罩む阿片の臭との間を、落ちつかぬ眼付をして互に肩と肩とを苦しげに摩り合はせ、右顧左盼し乍ら游ぐやうに人集りの波に揉まれ行く圖を想像して御覽下さい。

理智も節制も自尊も内省も、人類の有すべき凡ての内的補飾を棄た醜い肉塊の大集團を……

尖頭に進んだ案内役たるY機關士は、私共を見失はまいとして、屢々振顧らうと試みるやうでしたが、氣の毒にも其顏を後方に向けることさへ出來ぬやうでした。

此等群集の波がへし合ひもみ合ひ、徒に立ちさわぐ間に混じつて所々に一二の卓子と五六の椅子とを据ゑた所が有ります。

群集の波が渦卷の如くさわぎ、鳴戸の如く亂るゝのも、かう云ふセンター、オブ、アトラクションが所々にあるからなのです。

此机と椅子との場所には、屹度椰油で黑く堅く練かためた髮を輝かせ、

目も覺むるやうな官能的の寬袍を着た女が、人形のやうに滑らかな冷たい顏をして坐つて居ります。時にはわざとらしく眉目に深く剃刀　疵痕を殘したのも多く見うけられました。

是等の肉をひさぐ女の前にはきつと茶が置かれてあります。嫖客はお茶を飲みつゝ、その鬱結せるセキソトキシンの發散方法を交渉するのであります。

私共は心持ち惡さにそこ〳〵に辛くも其處を切り拔けて出ました。

歸途、車を黃浦江岸バンドの公園の畔に驅りながら、この立派な保養地が上海にありて、しかも上海土着の民の出入を禁止して居ると聞いて、私は倩々『商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花』の句を口吟まずには居られませんでした。

耳の掃除

支那人は悠長な國民である。嘗昔は唐堯から禪位の相談をうけて、わが耳こそおぞくも汚れたりと隷川の水で耳垢を洗ひ流した男がある。現今は禪位の相談も入閣の内命もない無名の船乘を對手に、頼みもせぬのに耳垢の掃除の押賣りをして歩く漢がある。

ヘイスト、メイキング、ライフとて、やれ當直勤務だとかやれ荷役だとか、忙しがり苦しがるものは他人事である。われはたゞ怪しげなる鞄から、色々怪しげなる道具をとり出して否應なしに對手の耳の穴をほじくり、一回五錢の報酬を贏獲れば我事終る、いつそ序にならう事なら耳垢など掘ちずとも五錢の白銅だけをとりたいと云ふのが彼等の商業的道德觀念である。

面白い觀念である。都合の好い天下泰平な觀念である。

これと類似の觀念を懷抱して飄然と船中に舞ひ込んで來る支那の商人は色々ある。

支那更紗とか煙草繪葉書とか萬花鏡とかを薦めるもの、『付流梨地上品花露水』などゝ金書した香水壜を振り舞はす男、絲と針とを心細き生業の資本として綻び物の修繕を搜して歩く女、レザーストラップを持つて剃刀研を標榜して歩く者、上甲板は大變な騒ぎである。

『貴方耳の穴？掘りますか、』と流暢な日本語で屢勸められる。面白い、興多い事だと思ふ。

蛙でさへ腸を掃除し、蚓蚓でさへ戯言を言ふ世の中である。

如何に多忙と困苦との間に生活するやうに生みつけられた船乗の身でも、時には動中有靜、忙中有閑の清境韻事を翫味する位の餘裕はあつて欲しいものである。此悟長な民から悠長な『耳のマッサージ』をうけて、いとも忙しい荷役の中から强制的の閑日月を享受しやうと試みた僕は、即ち一人の『耳掘り男』を呼び入れる。

古い小さな鞄から色々な不思議な道具が出て來る。ジョートと呼ぶのは耳朶及び耳廓の中の纖毛を刈る小さな剃刀である。次のワニ、シャムボー、シヒッと唱ふる大中小三種の耳搔きやうの棒は、耳糞を掘るに用ふる。其他ピンセットに似たチヘンツ、尖端に房毬のついたショチツ、刻みのあるコチャ

ン　無慮七八種の道具を使つて、閑々悠々として耳の穴を弄る所は實に春日遲々たる姿である。

巧に細毛を刷り、耳糞を削り、一々丁寧にチヘンツで摘み出し、コーチャンで最後のマッサージを行ふまで、何と云ふ好い心持ちであらう。何と云ふイージーライフの翫味であらう。

然し懐は倩々、他國語を巧に操る國民、手技の巧妙な國民に付き纏ふやうに思はれる暗い運命を想像するのを禁じ得なんだ。

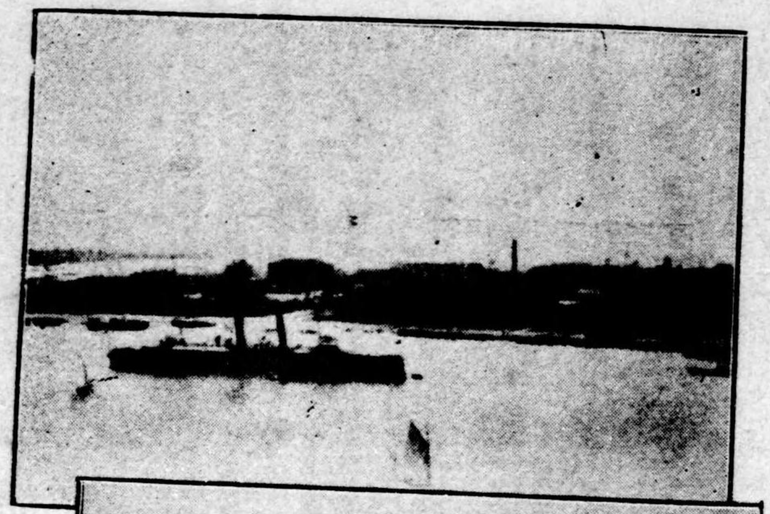
海より見たる香港

(上) 東洋一の夜景

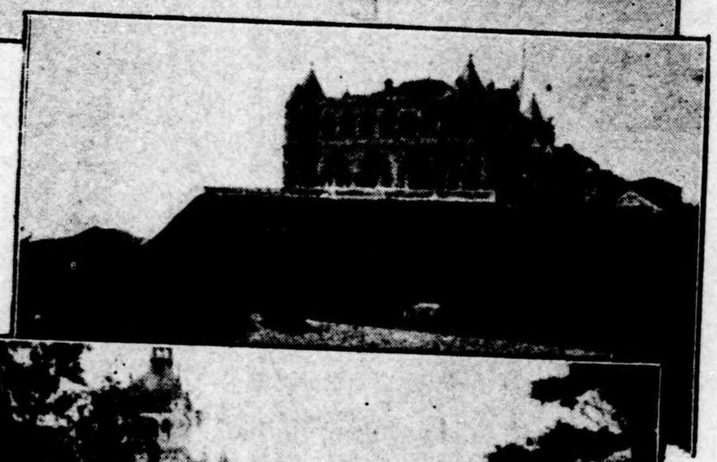
鐵血覆山山形改とは乃木大將の名吟である。爾靈山は砲火と肉彈とを以て其山容を變形させたのであるが、今鹿島丸のプープデッキに立てる私の眉に、迫るが如く聳えて居る香港の山々は、犇々と蜂の巣のやうに立ち並んだ蒿色の建築物を以て、巧に其山容を變身させて居る。

蜂の巣とは吾乍らいみじくも又巧なる形容詞を用ひしものかなと自ら感服する程に、全山凡て――低きは水際ちかくから、高きは雲に聳ゆる頂界線の緣に至るまで、山蜂の巣のやうな建築物が肩を怒らせ乍ら、櫛比參差して居る有樣は世にも奇しき眺めである。

此不思議なる景象に更に不思議なる色彩と容量とを加工するやうに意地惡く働く要因が其處にある。



貴浦江の上海錨地



香港總督の別邸

パンドの公園通り

かく横に立ちはだかり、上下に累々と積み重なつた建物がみな申し合せたやうに、黒味の勝つた煉瓦色であるのは其一である。

みな一樣に、コラムの部分が馬鹿にヒヨロ長い『柱廊』が椰子の並樹のやうにポカンと立ち續き、其上に貧相な『迫持揃』が間の抜けたやうに乘つかつて居るのが其二である。

此冷たい色彩と、此靜かに取りすましたコロシヤム風の樣式から放散する、一種の古い、靜かな、寂しい、陰氣な、『人の氣のないやうな印象』が其三である。

實際此等の細いコラムに、貧しい尖頂拱の建物が、心細く水際から山腹へ、山腹から頂界線へと立ち盡す有樣は、どう見ても有らゆる女王蜂が有り

と有らゆる雄蜂や職蜂の眷族を引連て、遠い花咲く國へ引つ越して行つたあ●●●との古巣とより思はれぬ。

此明巣のやうな貧相な家が、十歩の間に近づくとき、忽ち堂々たる大厦輪奐となつてわが眼を驚かすべく、巍然として目前にそゝり立つのは更に驚くべき奇異なる事相である。

この怪しき建物の山に、午後の五時頃となれば一時にパツと一大イルミネーションが點く。

三千年の昔から花鳥風月の外に出なんだ景象美に、夜景なるものを發明したものは二十世紀の文明の民である。

イルミネーションに趣味を有せず、キネオラマや賣藥の廣告に美意識を唆る事の出來ぬ者は、新しき自然美の鑑賞家でないと彼等は云ふであらう。

香港の夜景に惜しげもなく『東洋一』の敬稱を奉たものは彼等である。

蛾は燈に走り、女は香に走り、男は權勢に走り、そうして文明の民はイルミネーションに趨ると何かの本にあつたやうだ。

イルミネーションに趨らなんでもよろしい、併し高さ三百尺廣さ半圓孤に亙つて、ダリヤの如く咲き煙花の如く散れるこの夥しき灯の序列を見て、一度は驚き一度は讃嘆せねばならぬと香港の文明人は云ふであらう。

僕が二日間の香港碇泊中一度も上陸しなかつたのは色々の理由がある。

ペストが流行中であつたのも其一である。日に二三人は判を押したやうに怪我人のある（怪我人に對して市からは判を押したやうにその度に二十磅宛

の弔慰金を遺族にやる）アンセツサー（ケイプルカー）のある事は其二である。そして最後に荷役で忙しく上陸する時間の無かつた事は其第三である。

併し、一面香港マイナス夜景イクオール零と許りに、他も信じわれも思へる其夜景を見損うては……と云ふ縣念は其最も大にして最も有力なるものであつた。

（中）その港灣的ネーチュア

香港は四月二十二日の午前に出帆た。

此地から餘程知名の士か澤山渡航すると見え、舳を揃へて送つて來た多くの支那人のランチから、盛なる爆竹が乘組員を驚かすべく起つた。

港灣的素質から見て、香港は實に申し分のない好い港である。

北方九龍半島を隔てゝ廣東省の本土と相對した香港島其者が、南東西の風浪に對して自然の障壁をなして居る。しかも其東水道たる大欽門は蛇形に北へ北へと弧形をなして居るから、冬季に於ける北東の季候風に對しても、少からざる防風地位を占めて居ると云はねばならぬ。

大陸との間には、西水道に近い綠島を始めとして數多の島嶼が羅列して居るが、此等の軍港的要素は又香港が商港として保有すべき必要條件と抵觸せざる程度に於て、廣濶なる水面積を餘して居るので、船舶の運用上、海運上にも何等の障碍もない。

水深は平均四十呎を示し、潮汐の影響はかゝる地形とて多少の困難を感ずるも、桑港が有する如き變化極りなき急潮は勿論見る事が出來ぬ。

要するに香港は其辯護的立場から觀察して、アントワープの如き出入の不便を感ぜず、倫敦、上海の如く無用の時間を『潮待ち』なるものに費す不便もなく、コロンボ、神戸の如く强暴なる風浪に急襲さるゝの憂ひもなく、桑港、門司の如く砂堆や淺瀬を其港口に有たぬ點に於て理想に近き良港で有る。

自然は古より自然である。されば疇昔より巧に南支那海に出沒して、風の如く來り風の如く去り、流石不敵の航海者をも恐がらしめた海賊が、此地を擇んで以て其策戰脅掠の根據地と定めたのも理ある事である。

されば現今、湛々として靜かにルネツサンス式の建築物を蘸し、東洋一の夜景を輝かせる港内の碧波と雖も曾ては恨に燃ゆる紅の血汐を漱つた事もあらう。あるは力弱くも慘虐の暴手に抗せし美しき裾の影をも映したであらう。

黑き船の艙口より逞しきジャンクに移さるゝ珠玉瓔珞の數々、鐵槍と白刃との物凄く光る『八幡船』の旗影など默想し來れば、香港の碧波は何をか語り何をか笑ふであらう。

（下）飛魚を羨む

われを、視半徑五浬の圓孤の中心として、わが船は、同じ事相を把持しつゝ、時々刻々變化する小世界を、北緯四度二十三分東經百六度六分、蒼茫々たる南支那海の一隅に樹立せんと企てゝ居る。

四月二十六日の眞夜中である。

『銀の涙そぼ降る月の夜……』と歌つたシエレイを、再び此鹿島丸六十

呎の船橋に伴ひ來つて、共に歌ひ共に語り共に賞せんと望む程に、月光さやけき良夜である。

流るゝが如き月明嫦娥の精氣の、空にも海にも遍きにもめげず、吾こてもやわか劣るものかはと、綺羅の如く中空を飾つて居る星までが、雫せん計りに目に涼じく輝く良夜である。月明らかにして星又稀ならずとは今宵の如きを云ふであらう。

月は輝き、スパルは照り、星は雫する良夜に、金波をもみ玉兎を碎いて飛魚が盛に飛ぶ。いとも由々しけれ。

空には固より雲翳とてあらねば、海には固より細漪片漣をも認めず。船客も大方寢ねたり。草木も眠ると云ふ午前の二時なれば、船其ものも大方眠れ

る事であらう。海も眠り、船も眠り、人も——當直に立てる吾等二人の外は眠れるものを、目覺めずともあるべきに、さても小賢しくも風流びたる飛魚の振舞なるかなと云ひたい。

月を浴び月を潛りて、彼等の飛びゆくを見るに、大方は風上に向ひて双曲線形に孤狀をなして飛行するやうである。一つ飛べば、二つ三つ四つ吾劣らじと……。果ては畔より稻穗へと飛び散る蝗の如く、方向をも定めず永を潛つては飛び波を啄んでは飛ぶさま、かの幼き兒等のなす『水潛り』に異なる事なし。

小さき翼を羽叩いて高く舞ふ者は月を嘲る如く、低く翔る者は其間大凡三丁に及ぶべし。

彼等は海に生れて趣味に死するを得べし、海を慕ふて趣味に生き得ざる船乗は憐れむべし。

二、黒船物語

1. マドロスの青……六〇
2. 日本郵船の謎……六五
3. 吾が鹿島丸……七二
4. 犯罪の醸造所……七五
5. 岩村男の群……八〇
6. 賣られ行く女……八五
7. 離別會の踊……八九
8. 新嘉坡は暗黒の巣……九四
9. 新嘉坡の潛り……九九
10. 善茶目……一〇三
11. 自朝記……一一

マドロスの膏

鹿島丸が香港を出るとき、一等（定員百十二人）二等（同五十六人）特三等（同八人）三等（同百七十五人）とも、客室は皆一杯になつて、食事は一等の食卓で寢床は三等の長椅子の上と云ふやうな奇妙な船客さへ生ずるに至つた。

事務長、事務員、司厨長から末はボーイ、コック、バン燒に至るまで、『忙しいだから威張るんだ』と云ふムードを明かに顏に現し乍ら、時を得顏に振舞ふなど大變な盛況であつた。

船長、醫官、事務長等は其無聊を慰するに足る好箇の對象を獲たるを喜び、司厨長賄部ベイカー等の輩は四六時中たゞ手古舞に踊勞れ、理髮屋洗濯屋の

連中は多忙なるの故を以て乘組員などの御用は頭から輕蔑するに至つた。

一方積荷も各船艙（ホールド）の三分の二は既に滿たされたる程に、是に劣らぬ好成績である。

鹿を追ふものは獵犬である。鹿を獲るものは獲人である。

船は動き人は働き、荷主船客の縞の財布は傾け盡して丸の内の郵船會社に集まる。せち辛き世の中で最も便利な者は金子である。圓轉滑脫して捕捉し難きものは金員である。集まれる黃白は旋轉して築地、木挽町邊りで盛んに散らされて居るであらう。

一將功成つて萬骨枯ると云ふ古い諷刺語が成立する以上は、社會學の原則の中に萬人のマドロスが額に蹙して不眠と不休とに泣く時社長は鴨東の奴女

を落籍し、副社長は新橋の半玉に狎るゝなどと云ふ事を承認しても少しも不思議でないかも知らぬ。噂に聞けば、女は男を欺して面白く男は女に欺されて又面白いと云ふ。併し、さる定理は成立するとも、重役は徹夜で遊蕩して面白く、船乗は徹夜で荷役して面白いと云ふ推論は樹立すべく少しく困難であらう。

かゝる不平は不合理なものに相違なからう。併しかゝる無智の不平がドシドシと醸造さるゝ現今の社會組織――就中船乗社會には其處に何等かの大なる缺陥があるに違ひない。不平と失望と悲觀と自暴とは不可測の容量と不可測の速力を以て世に生れて來るにも拘らず之を慰むべき之を中和すべき新しき社會政策が未だ現れて來ないのは、世にも恐ろしく世にも悲しむべき事だ

と、彼等重役は一度でも念頭に思ひ浮かべた事があるであらうか?!

恐らくあるまい。貪欲飽く事を知らぬ彼等東洋の資本家は航路補助金に連關する對議會策にのみ腐心して、禍機は既に彼等の意外とする足の下に育くまれて居る事を忘れて居る。

狡猾なる彼等は其の尤もらしい營業報告、決算報告等に於て、巧に張尻を合せて議員、大臣、國民等凡てのサージュ、ドユ、イグニチズムを欺き終すであらうが、此正直なるマドロス共を永久に欺き終す事が出來るか何うか?。

日本郵船の謎

數多き郵船會社の航路の中で、會社に依つて以て最も有力なる收穫の對象

となすものは(一)歐洲航路(二)上海航路(三)孟買航路(四)五港定期(五)臺灣航路である、然しそれが果して航路補助金を與ふべき實質を具備するや……の點と、本邦の貿易上、殊に輸出貿易より見て重大なる關係を有する航路なるや……の點より考うるときは、歐洲及び孟買の兩航路は同會社の北米航路などに比して遙に遜色を示すものである。

今試みに『郵船』の歐洲航路に從事する定期船十一艘（他に二艘の不定期船あり）が毎航必ず其船腹の凡てを充滿せしむる貿易品に就て見ると、横濱神戸の二主要港より出づる輸出貿易品目は銅塊、絹物、陶磁器、美術品、豆油、魚油、木材（以上歐洲各港へ）、海產物（南清へ）、時計類（香港へ）位のもので其總噸數は一箇年に六萬八千噸位のものであらう。

是を同航路從事の各船が復航に於て、ミッドルスバロー、ロンドン、アントワープの三港より積載し來る輸入貿易品、銑鐵、鐵板、毛織物、機械類、硝子、鋼線、生糧品等、其總噸數約十七萬噸に比べると、輸出貿易奬勵の目的を以て下附さるゝ補助金の性質に適應すべく其實質の餘りに貧弱なるを認めねばならぬ。

さらば『日本郵船』は補助金なしに獨力を以て歐洲航路なるものを經營する事が出來るかどうかと云ふ問題が起つて來る。

この問題は今日我國に於ける幼稚なる造船及び海運と關聯して甚だ複雜なる思考を要する者であるが、私は近來の『日本郵船』の營業成績に徵して、充分獨立し得る狀態にある事を確信する者である。

何故ならば、郵船會社の收支決算表を見るに、船價償却費、ロイド保險料、修繕費の三費目を除いては、店費と云ひ、荷客費と云ひ、乃至は船費、石炭費等何れも同航路に於ける英佛獨米の諸船汽會社に比して遙に僅小なる支出に止まるからである。

先づ第一に船費の大部分を占むる石炭費に就て調べて見れば直ぐ判る。

『郵船』の歐洲航路船が石炭を積みとるのは、横濱、門司、長崎、新嘉坡、香港、ポートセッド、ミッドルスバロー、アントワープの諸港であるが往復港を通じて其總噸數の半は門司（又は長崎）、横濱、香港、新嘉坡等に於て積艙する唐津炭である。而して該炭の英炭等に比して遙に低廉なるは人のよく知る所である。

飜つて、同航路船が其往航に於て、香港、新嘉坡、マラッカ、彼南、コロンボ等の印度洋沿岸の各地間に於て營まる〻沿岸貿易の收入に對する營業稅の賦課の狀況、及び復航に於て歐洲本土各地より海峽植民地に向ふ輸出貿易品の運賃と課稅との關係等、陸人のよくも知らざる營業上の祕密に思を馳するならば、世の中に正直なる小羊の多いのに一驚を吃するであらう。

たゞ玆に幾分考慮すべきは、郵船會社とP・O・ジャーマンハンバーク、ジャマンロイド、シャイヤーライン、ベンライン、ハンザーライン、諸會社の間に締結せられたる海運同盟の協定運賃價格より、郵船會社は果して幾何パーセントの割引をなせるやと云ふ點で有る。

併しコンフエレンスなるものが、無智なる競爭を避けんとする各會社の敵

本主義より生れ出でたるものとせば、郵便會社のみ莫大の割引を敢行して平地に波瀾を捲き起し、同盟各會社の嫉視を受くる事は最も忌むべき下策なるを以て、郵船會社のみ獨り尨大なる荷客費に困しむ筈はない譯である。

さらば補助金に對して會社が據つて以つて辨疏自衞の好費自となすスエズ運河通航料は如何と云ふに、其金額は一年に凡そ七十四萬圓（現在の補助金額の四分の一）と稱するのであるか、こはスエズ運河通過噸數一噸につき五志六片の通過率を以て算出したのであるから、通過料の漸次に遞減しつゝある今日、頃者海運學者問に唱說せらるゝ如く一ケ年九十萬圓の改正補助金額（全體）にて充分事足るべく、會社は補助金削減に依つて直ちに同航路保存不可能抔とさわぐ事を許さない。

況してや定期船に對しては通過料に一定の割引をなす等の優遇があるに於てをやである。

二千二百萬圓と號する資本金の下に、日本郵船會社は八十艘以上の使用船と、横濱、神戸、長崎、上海、香港、ロンドンの六支店及び多くの代理店とそれ等の支店代理店附屬の敷地、倉庫、艀船等無慮三億萬圓に餘る財產を所有する外に二千五百萬圓と云ふ積立金を有つて居る。

かゝる東洋一の廣大なる海運會社が尙ほ四百六十萬圓（歐洲航路のみにても三百十七萬圓）と云ふ莫大な補助金を貰はなくては社運が衰亡に傾くとは小兒でも鄰人でも到底首肯する事の出來ぬ謎で存る。

やれ積立金だとか、ロイドサーベイヤーの保險金だとか、船價償却費、修

繕費、荷物募集費、給料手當、機密費、營業稅等廣大なる營業費を控除しても尙ほ過去十數年に亙りて常に一割五分乃至二割の配當をなし得たと云ふ事實は、前記の謎をして益々アンコンプレアンシブルならしむるものである。

福澤桃介氏の所謂『五十萬圓の脫稅事件』の如きは、かゝる謎の副產物に過ぎぬ。

憐なる日本の民の膏は、助補金なる名の下に、莫大なる道樂費とコムミッションとに變化して資本家と大臣と議員との懷に入るのである。

憐なる日本の船乘は『泥棒の提燈持ち』となつて不正の金『航路補助金』の狡猾なる獲得に共手先となつて默從的に働かねばならぬのである。

亦幸なるかな。

わが鹿島丸

日本郵船が鹿島丸の新造を神戸なる川崎造船所に委する時、同じく混合船ながら、如何なるパーセンテージを以て構造上の希望を其の造船計畫に現はしたか、夫は知らぬ。

併し乍ら此の混合船なる船型の甚だ利益あるものである事は、既に海事界の定論である。

本船今次の航海に於て、ピナン、マラッカ等の僻陬の地に於ても相當の積荷を得たる事は之を證する第一の事實である。

香港に於て既に各船艙の三分の二の容積を充滿せしが如きは之を證する第

二の事實である。一方船客も赤其數を增加し、本船今次の成績は『郵便』諸船のレコードを作れるものとまで噂せらるゝ程の好景況である。或る一等船客の各きは昨年の十一月から上海支店へ乘船を申し込み、漸く本船に間に合つたと語つて居た。

斯く海事會社の營利の對象として二つの見事なる獲物が同時に同方面に現はれ來るとき、當事者が大に研究し大なる改善を企畫すべきは、對船客設備と對積荷設備との間に力めて調和點を見出し、力めて一致點を求むることである。例へば揚貨機の構造、船艙の位置、換氣筒、採光窓の構造及位置等の研究改良は常に彼等の念頭に置かるべき重要なる疑問であらねばならぬ。

然るに今日『郵船』の最大巨船と稱せらるゝ本船の構造に就て見ると、此

點に就ては殆んど零と云つても好い。

第一に五番六悉の船艙と二等船客望との位置の相互關係は極めて拙劣である。何故エレクションを後部にもう少し延長して二等室を作り、船艙の後部に近く選定するの途に出でなかつたか、何故ブープ甲板とプロムナード甲板との間にフラインダブリッジを作らなかつたか、其他、何故換氣筒は室の四隅に開口するやうにスペイスを利用しなかつたか、何故換氣筒はより少し高くして、六番船艙に積取るコプラ等の荷物から出る臭氣を船客の嗅覺より遠くるやうに力めなかつたが、何故電氣又は水壓を原動力とする揚貨機を据えつけて、より圓滑により敏活に荷役の出來る樣にしなかつたが。講究すれば研究改良すべき點は幾らでもある。揚貨機に汽力を用ゆるは既に古しとして

全然他の原動力に代へた會社もあるではないか。

『郵船』がピーオー、ジャーマンメイル、フレンチメイル等の諸會社船よりも不完全なる設備を有する混合船の多くを擁して尚今日の小康を貪りつゝあるのは全く其の一等船客偏重主義より來るもので、二等船客に對する諸設備は實に不親切を極めて居る。

二等と一等との運賃の相違は（神戸よりマルセイユ迄）約百圓に過ぎない。而して此相違に對して、二等に於ける食事、居室、喫煙室、食堂、ソーシアルホール、バス、娯樂等の設備か如何に違つて居るかは船に乘らぬものには迚も想像する事が出來ぬ程である。

こは一に、會社が定員百十二人（二等船客の倍數）の一等船客の運賃より

來る利益を以て、一年凡そ七十四萬圓のスエズ運河通航料を償はんとする方針より來るに因るのである。

犯罪の釀造場

船に來て先づ驚くのは、五番の艙口を隔てゝ僅かに百圓違ひの貴族と平民との世界が相隣して居る事である。貴族とは云ふ迄もなく一等船客の事であるが、此貴族的地位を總て金で買ひとると云つた如な顏をして居るのが毛唐である。

數多い一等船客の中でも毛唐ほど横柄で非常識で、無風流で癪にさわる奴はない。横柄でも、理不盡でも、不正義でも、エゴイズムでも何でもかんで

も金子さへ出せば凡てを買へるものだと云つたやうな巨きな面をして居る。

僕は古から宿屋の番頭と執事と云ふ職業は世の中で一番下等なものだと思つて居る。併し今日斯うやつて、御機嫌こそ取らね、こんな不心得の輩を乘せた船を動かさねばならぬかと思ふと、自分のして居る仕事は番頭や執事に少しも變らぬ樣な氣がする。實際船乘も餘り望ましいものぢやない。此方が一生懸命で荷役をして居る時など、傲然とプロムナード甲板から葉卷を喫へた赤つ面が見下して居るのでも見上げると、此悲慘なる皮肉に對する丈でも『聰明なストライキ』は船乘仲間の爲に必要だと、衷心から思はれる位である。

現今本船に乘つて居る一等船客は殆ど全部毛唐で、日本人は某の銀行總

裁夫人及び其令孃、某新聞記者、上海から便乘した一人のお醫者さんと都合四人に過ぎぬ。此四人の中二人は、愚かなる虛榮と下手な技巧とを弄したがる女の事であるから別として、二人の男に至るまで、俄仕立の紳士はこちらで御座いと急に納まり返るに至つてば鼻持ちのならぬ事夥しい。と、かく云ふのは下世話に云ふ『貧乏人の僻み』からでは決してない。かゝる惡むべき氣位と自負との懷抱する樣に馴致した、會社の對船客方針が惡いからである。何故單に所謂『有口の貨物』として彼等船客を取扱ひ得ぬかを聞きたいからである。

人間と云ふものが、陸上に於ても多くの場合、單に衝突的、本能的にのみ進退する甚だ充らぬ者であると云ふ事は、かのオットー、ワイニンゲルの所

説に俟たなくとも明かなる事實である。

併し性能の命ずるまゝに衝突的本能的にのみ動くことは、それは卽ち彼等をして危險なる社會的地位に導いて行くことである……とは彼等の永い多くの經驗が敎へて居る。

宗敎と道德の監視の前には、流石の彼等と雖も殊勝氣に謹厚と嚴格の面を被らなければならぬ。勿論これはエホバの裔孫たる彼等には堪へられる事ではない。かく觀照に於ても省察に於ても大なる內的矛盾を自覺する彼等は、わが自墮樂と我儘と小自我を具象化すべき妾宅を探して、遂に船中生活を得たのである。

メルエスプリは吾人船乘にとつては、消極的禁欲主義の强制者であると共

に、是等陸人にとつてはクワールセツユアルの敎唆者である。

かくして彼等の抱懷するメルエスプリは、私に『海は好きだが船乘生業は嫌ひだ』。と云ふ觀念を强く印象せしめたのである。外國船には、船客を對手に醜業を働く女か澤山乘り込んで居ると云ふ。併し船中の生活はかゝる醜業婦の跳梁を要せざる程に、本能主義的である。人生充實主義的である。

單調無味なる閑日月を送りつゝ、若い血が脈胳の到る所に小躍りして居る若い男と女が、狹い船內にて朝夕同じ顏を見合せて居る。

船內の空氣は凡て官能的である。食物はどうやら肉慾を昂奮せしむるやうなもの許りである。船中の居室は密閉式である。

凡ての條件が曰く附きである。眞夜中の巡檢の際、怪しき男女が、酒場で

醉ひ狂つて居つたり、喫煙室で深更までトラムプを弄んで居つたり、プロムナードデッキの小暗き場所に喃々の艶語を聞いたり、聲高き接吻の音を聽いたり、周章したるスカートの影を見たりする。

或る人が客船は犯罪の醸造所であると言つたのは穿ちたる言葉で有る。

女の一人旅、男の一人旅、無聊に苦しむ生活と寞寂に悶ゆる彼等の心と！

禍は實に此處にある。

岩村男の群

私がこの鹿島丸の第二次航に於て一方に所謂貴族の横暴を見乍ら、割合に面白く割合に徒然ならず、比較に單調ならざりし理由を求められたならば、

直に二等船客の中に東京美術學校教授岩村男爵のありし事を擧げようと思ふ。

かゝる場合、多くの敍述の筆は其當面の人物其人の風采から說き起さるべき筈である。しかし乍らかゝる文章の構成法は或る場合、却て其人に取つて有難迷惑な事がある。吾が男爵閣下も其例の一人に洩れぬ事は私の甚だ遺憾とする所である。

私は男爵閣下の惡口を云ふ積りでは決しをない。人を褒めるに二つの道がある。

直接法式に正攻法式に褒められた時、すぐ有頂點になる人があるおめでたい人である。形而下の自惚に滿足する趣味低級の人である。一面聰明にして

一面喰へないネイチユアを有つて居るわが岩村男は、そんな生やさしいオダテに乗る人ではない。そこで私は悪口を言ふやうに見せかける。

私は貧しい乍らも私の過去の知識の世界の何處を捜しても、バロン岩村の如く平民的の人を見ない。何處を捜しても斯くの如く野次馬性の發達せる人を見ない。何處を捜しても彼れが如く多趣多藝にして、所謂『口も八丁手も亦八丁的』の人も見ない。

學校ではデザインと建築史とを擔任せられて居るとの事だが、嘸かし、例の談論風發の怪氣焔を以て――或は恐る半は法螺を以て――學生を誤魔化したり煙に捲いたりなさるであらう。

此バロンを梁山伯の親玉として、其周圍には花和尚魯智深や、林冲や、黒

旋風李逵を以て自任する連中が、得意氣に馳せ參じて、一種の無邪氣なるグループをなし、皮肉に、悪口に、駄洒落に、……何とかして、身に襲ひ來る無聊から逃れやう〳〵と、日々大童になつて奮闘して居る。

輪投げ、デツキビリヤード、碁、將棋、讀書等、船より提供し得る有らゆる娯樂に倦んだ彼等太平の逸民は、苦し紛れに勝手な緯名を手當り次第に人々に命名して喜んで居る。西洋人であれ、日本人であれ、此鋭い諷刺、反語の鋒先に一人として重傷薄手の手傷を負はぬものはない、中には矢を蒙ると蝟の如く完膚なしと云ふやうな被害者もある。『石版摺の沙翁』とか『てんのうじ山』とか『鴨』とか云ふのは其白眉たるものである。

字を能くし、尺八に巧みにして、法螺に長じ、悪口を特意とする梁山伯の

麾下には、諷刺畫を以て有名なる瓢逸畫伯宇和川さんが居る。『船内ペック』發行主任である。笑聲が陽氣なべイ〻で常に快活な顏をした津島さんが有る。『船内新聞』の編輯長である。其他所謂鷄、鳴、狗、盜の輩は……怒つてはいけない……數知れぬほど。

バロン閣下の音頭の下に是等の諸豪が喫煙濛々たる煙草の雲の中にアントワープの女を語り、夕にサロンに滿を引いては享樂主義や本能主義の提唱に是れ力むる有樣は、實に凄じい武者振りである。

初め二等船客の中には、是等の閾外に立たうとした二組の眞面目な群があつた。矢吹少佐に率ゐられて英國の宗教大會に臨場する救世軍の人々と、文部省から派遣された廣島高等師範の先生方とで有つた。處が是等の硬派も

かの亂暴な内容充實主義者の爲めには散々な目に逢はされて、爾今廣島派は袴を穿いて食堂に出入することを思ひ止まり、救世軍は基督の神聖を當り構はず皷吹する僞善を見合せる樣になつた。

賣られ行く女

私の筆はこゝで、是等太平の逸民から離れて、憐なる賣られ行く女の身の上に及ばんとする。

賣られ行く女！世にもいやな言葉である。世にも憐な言葉である。

實際を言へば本航今次の三等客は是等のムスメサンの群ばかりではない、香港で下船る商賣人も、コロムボ行きの本願寺布教僧も、新嘉坡の護謨山に

行く海外の發展者も、其中に居るのである。

『賣られ行く女』などと云ふ標題は聊かグロテスクの譏を免れないかも知れないが、長崎で貧しき盛裝に包まれた是等の女たちが、眼に涙なく頬に愁ひなく、遊山か旅行にでも出かけるときのやうな平氣な顏をして舷梯を上つて來たのを見て僕は非常に強い印象かうけたからである。

歐洲行の定期船が門司や長崎を出帆るときは、毎航とも必ず二十人や三十人の此種の女を積んでゆくとの事である。

彼等は自己の現在の危險も將來の淪落も全く無意識にたゞ『珍らしい外國へ行く』なる一句に釣られてゆく者であらうか、或は又親や家のために泣く泣くその怕ろしい――再び母國に歸ることの不可能なる怖ろしい――運命に屈

伏してゆくのだらうか、中には虛榮と自墮落と淫逸との欲求に吾からわが心をうち碎いて行く者はないだらうか。

本人も、兩親も其情實と裏面とを心得ぬに乘じて、巧に口車にかけて旨々と誘拐して行く惡者も其處にかくれて居るに違ひない。

然し彼等の大部分は、十分自己の未來を支配すべき怖ろしい羞づかしい運命を自覺する事よりも、尙娘の中に何とかして立派な嫁入り支度を稼がねばならぬと云ふ風土的觀念に、より强く捉はれたる女たちである。

卽ち彼等は『島原女』である。佐賀縣の一部・長崎縣の大部、福岡縣熊本縣の小部には、かゝる無智なる地方特色が平氣に若い人々の心を捉へて居るのである。

親は娘が汽船に乘つて、炎熱瘴癘の蠻地に遠征するのを見て、一日も早く其の娘の出世して歸國するのを冀ふであらう、娘も又一種の得意と希望とを以て朋輩を羨ましがらせ、生別又死別を兼ぬるとも知らずして其鄕關を辭するのであらう。

是等のムスメたちが、新嘉坡近くなるに從つて、汚い狹い暗い暑い三等室に、凝乎として居られずぞろ〳〵と細帶一つのしどけない姿で甲板に現はれて來る、美しい色絹のスカートをつけた「上品な僞善の民」は迂散臭い眼附をして一等室の上から見下して居る。好い對照である。

かく多くのサフオーが涼みに出るときは、きつと一人か二人の目の鋭い皺の深い色の黑い男か女が、附添人のやうにつき纏はつて居る。

甘い口車誘惑に乘せられて來た比較的若い初心なムスメが、その怖ろしい未來を朧げ乍らも細い管から覗き見て、恐怖に伴ふ絶望から飛んだ分別をもしかねまじきを、監視する爲である。

離別會の踊

一體三等客をスチヤレイジ、パツセンジャーなどと云ふのからして失敬である。スチヤレイジとは『舵の利く』と云ふ義である。

舵の利く利かぬは、船尾が適當に水中に沈んで居るや否やに依つて大は影響する。即ち船尾のケビンに雜魚寢をして居る三等客の數量は直ちに舵能に關係するので、偖こそ斯くは呼ぶのである。

されば會社の重役などの眼から見たならば、スチャレイジ、パッセンジャーとかデッキ、パッセンジャー（甲板の上に直接常住衣食する船客）などと云ふものは、たゞ喧しい口と小うるさい眼を有つて居る外には、貨物と別に違つた所はないやうに見えるであらう。

今本船に居る是等『有口の貨物』は、ロンドン行きの二三人を除く外は、總てマラッカ半島に發展する人々である。新嘉坡、『ゴム山』にもぐり込む『杣さん』と、『賣られ行く女』とが其中堅をなして居る。而して此人たちは明後日は新嘉坡へ着くと云ふその晩に、離別會なるものを六番の中甲板に開いた。

新嘉坡は西暦の何年に、誰によつて發見せられたかは、史家も明かに吾等

に語つて居らぬ。併し夫れが葡萄牙の印度總督たるアルブケルケの執政中であることゝ、其發見者は何れは粗野にして貪慾、無情にして名利的なる品性の男で有つた事は間違ひがなからう。

新嘉坡とし聞けば、吾等は炎熱瘴癘の蠻地を憶ひ出す。マラリヤ病や黒死病等の怖ろしい傳染病の巣窟で有る事を考へる。ビーチコーマーやショウハッガー等の浮浪者が凄い眼をして散歩して居る所だと思ふ。赤道直下の白粉の女が倦怠せる肉塊を惜げもなく躍ぐ所だと考へる。貪慾な二十世紀の成金黨がゴム山にたてこもる所だと想像する。モナコと並稱せらるゝ世界の賭博免許場たるジョホールの王國を想ひ出すさうして、最後に日本一のヴオカリストたる環女史が亡命せる所だと思ふ。

三等國の葡人に由つて發見せられ、殖民せられた新嘉坡は世界の有らゆる三等階級の人々によつて啓開せられ、維持せられ、住み崩されて來た。かくして私は新嘉坡へ渡るのには三等船客でなければならぬやうに思ふ。又夫が最も相應しく感ずる。

私共は此會合を記念として二日の後には、再會する事が出來るかどうか判らない夫々異つた生活に入るので有ります。併し乍ら知る人ぞ知る吾々海外の發展者は國家の爲め……

一人の中年の男が立ち上つて斯樣な開會の辭を述べて居る。六番船尾上の離別會である。

腰掛を四角形に並べた臨時の食卓の上には、麥酒とサイダーの瓶と茶飲み

茶腕とが載せられて、浴衣を片肌脱ぎにした男共と、胸をはだけて力なく扇を動かす女連とが其前に並んで坐つて居る。

まだ麥酒もサイダーも飲まねうちから。既に十分醉つぱらつたやうな此男の不思議な演說がすんだとき、『海外の發展』とか『國力の膨脹』とか言ふ樣い勇ましい言葉に皷舞せられた彼等偉大なる國家的犧牲者は、嬉しげにパチ〳〵。拍手した。『賣られ行く女』も、『ゴム山の杣さん』も、みな一樣に滿足せるムードを顏に示し乍ら……。みな一樣に感激の眼をしばたゝき乍ら……。

それから若い人々の茶番や。半白の老人が、船内では珍らしい三味線で淨瑠璃の何とか云ふ一條を彈き語りなどした後、薄鼠色の奇怪な布帛を股間にチラつかせて居るのも知らぬ一人の男が怪しげな躍を躍つた。

一等二等などからも多くの毛唐が見物に來て居た。

新嘉坡暗黑の巣

印象は瞬間にして絶對なる性質を具有するものであるとは平素からの持説であるが、新嘉坡に來て倩々身に泌めて成程と感じた。と、こゝで辭るのは意地の惡い友達から、貴公は餘程思想上の周章者である、變節漢であると譏られるのを避けんが爲でわる。

妄動有悔、妄言多過、不如靜而不動……位の事は俺だつて心得て居る。併しつい一週間か十日許り前には恐ろしく褒めちぎつた支那人の人足を、この地では口を極めて熱罵冷笑しなければならぬとは吾乍ら苦しい立場である

全く新嘉坡のチャンコロは始末にをへぬ輩である。箸にも棒にもかゝらない、素麺のやうな奴等だとは恐らく彼奴等の事を言つたのだらうと思ふ。

印度人は獰猛であるとは豫て噂に聞いて居つた。凡てが海賊式に、凡てが摺れつからし的に、凡てが無賴漢式に出來上つて居ると。言ふ事を聞いたとき、倦怠と無氣力と野呂間と……凡ての粘液質の性能を有すべき南方人種にも似合はぬ事だと思つた。

然るに新嘉坡のチャンは此等の凄味の上に更に殖民根性と云ふ惡癖まで背負つて居るので、やり方一つで何をしでかすか分つたものではない。

騙しては欺かれず、賺しては附け上り、叱り付けると直ぐ反抗し、威嚇すれば反響の如くストライキを起し、默つて居ればノラクラと何時荷役をすま

して出帆が出來るかわからない。いやはや實に何ともかとも申上げ樣がない。仲仕でも人足でも働く奴は十人の中二三人で、他は悉く荷物の上にひつくり返つて例の譯の解らない亡國の歌をうたつて居る。

彼等は荷役中定つて煙草を呉れと云ふ。煙草を與つても彼等は惡戯をする。やらなければ益惡戯をする。惡戯とは、知らぬ間にこつそり鳳梨の箱を切つたり、サイダーの瓶を空にする事である。それが爲めわざ〳〵監視に入れてあるダムビロマン（船の水夫が勤める）の眼をかすめて巧に仕事をする所を見ると、成程手品は支那人や印度人に限ると思はれる。

同じ人足でもマレイ人やキリン人などはまだ〳〵扱ひ好い、何故ならば彼等は支那人よりも少しく團體的集結力を持つて居るが故に、親方の言ふ事は

比較的よく服從するからである。

此地のマレイ人は略ボーヤン、ジヤバ、マレイの三種であつて、皆無髮で、例の房のない『赤い帽子』と、チエツク形の袴とを履いて居る。

是等の繪に書いたやうな多くのマレイ人（と云つて賞る爲めの形容詞ではないが）澤山一所に集まつて、喧々と食事をして居る所は又一つの奇觀である。彼等は決して小刀も匙も肉刺も使はない。又左手を食事用には使はない。だゞ右手の五指を忙はしく用ひて、薄つぺらなブリキ製の大きな平たいお椀に入れたカレーライスと魚肉とをかきまぜては、猫が手を振るやうにして口腔へ摑み入れる。

彼等は世界に於て最も暑い所の產で、常に炎熱酷暑と戰ふ爲めに黑い軀は

蛇のやうに瘠せて縮く、氣持ちの悪い程ドス黄ろく無茶苦茶に辛いカレーの汁を飯にかけて喰ふ。而して西洋人の肉刺は、これを象徴したものだと謂はれて居る彼等の右手は、實に清淨にして神聖なもので、彼等は決して之を他の不潔な用事に使はぬさうである。

かくの如く新嘉坡はかの上海に劣らぬ程に、著しく殖民地的色彩を具有した處で、如何に殺伐にして卑俗な場所であるかは、船に仕事に來る人種を觀察しても直ぐに分る。或る人が、新嘉坡は道徳上の罪人か、刑事上の被告が一時世間の批評からかくれる爲の暗黑の巣であると云つたのは寧ろ肯綮に當つて居る。從つて世界各國の色々の人種が背中合せに住んで居るが、其中で最も勢力のあるものは上流の英國人と下流のマレイ人とであらう。

新嘉坡にはマレイ人の外に、キリン族――有髪にして金色ののコーヒヤを冠つて居るヒンヅーの一派――の大部分と支那人とが下層の間に大なる勢力を張つて居る。

新嘉坡の潜り

新嘉坡へ船が入ると遙向ふの陸から眞黑な海邊の土人が、輕快な小舟を巧に操つて、蓮の葉にとまつた蛙のやうに陸續と船の周圍に漕いで來る。是が有名なシンガポール。ダイヴーである。

船が船尾に白い泡を吹いてまだ進行中であるにも拘らず、是のダイヴー――船客の財布の口が好奇的油斷から擴げらるゝことのみを狙ふの外、他の一

切の危險も事物も環象も顧慮しない大膽な黑い乞食――は、輕快なカノーを輕く快く動かし乍ら、『十錢銀貨を投げて下さい、何處へ投につて直に取つて見せますから』などゝわめき散らす。

五月蠅い事夥しい。

始めの中は客も拾ひ易いやうに成るべく船の近邊に落してやる。杓子のやうな輕い櫂で左右の水をかき乍ら、ツーツ〳〵と船を進めて來たダイヴーは船が其處へ近づくに從つて浮腰となり、浮腰から、居合腰に、居合腰から屁つぴり腰となり、遂に櫂を捨て船首につゝ立ち上る。櫂は流れ船は辷り、ダイヴーの黑い細い蛇の樣な身體がスル〳〵と反身に伸び上るかと見ると、もう船の上には人影もなく、碧い波に白い泡沫を殘して、二本の黑い足が蛙の

如く逆さに水を蹴つて居るのが見ゆる許りである。

碧い波と熱い光線の爲めに、うす氣味わるく黑く光る頭腦を舷に出して何とか嬉しげに叫び乍ら十錢銀貨を舟の中へ投げ入れる所は、どうしても河童の一族である。

大地をうつ槌は外れても、新嘉坡の海に落ちる銀貨は外れつこはないと言つたやうな面魂である。

疇昔三國志時代の支那の軍人は、敵の首を獲ること甕中の物を搜るが如く……などゝ云つたものだが、新嘉坡の『潛り君』に言はせたら容易い事は『水中の銀貨を搜るが如く』と云ふであらう。

投げる所が遠くなれば、ダイヴーの舟の操縱はたゞ其につれて、益々巧妙

に、身體のモーションは益々迅速になる許りで、結局銀貨の水底に屆かぬ中に途中で拾ひとると云ふ事實には何等の相違がない。中には生意氣に二箇を同時に異なる方面に投げさせて、わざと泡を食つたやうに周章てた樣を兄せ乍ら夫でチャンと二つとも握つて來るやつもある。

私はこの時つく〴〵考へた。こんな怪物が七百年前に日本に生きて居つたら、青砥藤綱は二百文だつたか三百文だつたか、あんな高價い炬火代を拂ふ必要もなかつたであらうと。

善茶目

『チヤメに二種類ある。善ちやめと惡ちやめとである。等しく惡戯盛りの子供でも、罪のない馬鹿に愛くるしい奴と、見るからに憎々しい奴とがある』とは『二等室の太平の逸民』が勝手に決めた定義である。わがマスタークラウドを『善ちやめ』と命名したのも、かゝる假說から出立したのださうだ。

その名づけ親は判然しないが、私の見る處によると例の宇和川畫伯らしい。何故ならば彼の『善ちやめ』君が畫伯を『チョコレイトジエントルマン』とよんで、チョコレイトをねだるのでも判る。

昔から天使にも比喩へらるゝ子供に向つてさへも、かく際だつて使ひ分けらるゝ程に、人間の心の中には強い愛憎の念が深く潛んで居るものと見える。

善ちやめ及び彼の小さな妹エフホーンは、つい三週間許り前に急に母親に死なれた爲め、父親に連れられて今しもロンドンに歸るのだと云ふ。兩人

ともよく似た顔の、クリ〳〵した、可愛氣の多い子供である。しかし惡戯も亦はげしく、其に對する父親の躾も亦仲々嚴重である。

私は新嘉坡碇泊中圖らずも『二等の喫煙室』で、謹んで善ちやめ君のオイタを拜見するの光榮を得た。初め兄と妹とで、室の中から同室備へ附けの碁石を摑んでは窓から投げ出し、摑んでは投げ出して面白がつて遊んで居た。

かゝる子供の惡戯をして喜んで居るのはさしたる邪氣のあるものではない。

すると後甲板の藤椅子の上で涼んで居た日本人がやつて來て、餘りに石が失くなるやうだと注意する。私はこの、過去に於て隨分と有邪氣な惡戯をし盡して來たやうな大供の眞面目な顔を見て、たゞ一種の可笑味を感じたのみであつた。

子供に言つても止めそうにもないし、今に何とかなるだらう。ぢつと此儘傍觀的地位に居つた方が面白い。併し其れではあんまりな……と考へたとき、一人の男――其れは二人の父親であつた――がつか〳〵と入つて來て、物を言はず持つて居つた其碁石入れをとり上げて、さて無言のまゝ散らばつて居る碁石を指さして拾へと云ふ。

子供は自己の淸興をふみ荒され、わが面白味と滿足とを迫害された口惜しさに固より云ふ事を聞かない。そこで始めて『制裁の鞭』が下される。甚だ合理的である。如何にもアングロサキソンのやりそうな事だと思ふ。

父親は穿いて居たスリッパで、小さな柔かい肉付の好いお尻を目がけて丁〳〵發矢と續けうちにうつ。――是は少し酷い、固より上品の家庭でないから

無理もないが。兎に角かくして子供に正義の觀念を與ふるのは頗る氣に入る。子供は勿論大袈裟に悲鳴を擧げて泣く。泣いてもかまはぬ。

他人の子供でも其苦しさうな泣き聲を聞いては氣に毒になる。況して生みの子である。可哀さうと思はぬ事はない。彼は果して『泣いて馬稷を斬る』底の深い考へがあつて子供の將來の爲だと思つてやるのか、又はかゝる正義の觀念が無意識の中に彼等の思想上にかの權務思想の如く蟠居して居るのか其は判らない。

いやだと泣く兒を叱りつけては石を拾はせ、遂には一も殘らぬまで堪念に拾はせる。泣くのも喚くのも更に介意せぬ氣である。自分でした無調法は自分で跡仕末すべきだと云ふのが彼等の主義であるらしい。

この毛色の異つた教育法に尠からず驚嘆した私は、更に驚嘆すべき次の事實を發見した。

東洋人は得てかゝる愁嘆場を見るとき、消極的の姑息な惻憶の情とやらを起したがる人種である。私も其例に洩れず、餘りのいぢらしさに碁石を拾ふのを手傳はうとしたとき、明かに父親の顏に、餘計なおせつかいをするなと云ふ苦々しい表情を見た事である。そうして更に驚いたのは今まで容易に拾はうともしなかつた此小さな頑是ない子供が、『ノーノー』と云ひ乍ら急に一人で拾つて了つた事である。

私は感心した。『此親にして此子あり』とはかゝる場合に用ひる形容詞であらうと考へたほどに。

しかし聊か癪にさはつた。世の中で何が一番氣色を損するかと云つて『らしからぬ』と云ふこと程癪にさはるものはない。女の女らしからぬ、軍人の軍人らしからぬ、先生の先生らしからぬ、船乗りの船乗らしからぬ、皆いやなものである。殊に子供の子供らしからぬほど、いやなものはない。

無邪氣で有るべきものが執拗で有つたり、天眞爛漫で有るべきものが理性の爲めに其眞情の發露を矯められて居つたり、快活で有るべきものがいやに含羞んだり、又はとり濟まして居るのは、他人の子供でも面憎いものである。

此善ちやめも少しく其傾きを有つてゐる。何故私が同情の手を出したとき、其に伴れられてワーッと泣き崩れないのか。毛唐の子供は由來人形のやうに愛くるしく、人形のやうに冷めたいやつである。

『善ちやめ』君に叱られて、器量を下げ乍ら悄々と退却した私が斯く考へて居る中に、他の一方には又もやドエライ事が持上りつゝあつたのである。

其は、かくして此理智的の悲劇の一幕は、これで無事に濟んだと思つた頃お能の面でも冠り換へたか？と疑ふ程に、急にヤレマア可哀いさうな事をしたと云ふ見得をした例の父親がつかつかと入つて來て、いきなりまだ泣いて居る兄と妹を交るゞ抱き上げては温かい接吻を與へたり、ハンケチで顔を拭いてやつたり、チヨコレイトを與れたり、英國へ歸つたら玩具をどつさり買つてやるからなどゝ御べつかを使つたり、盛に御機嫌をとり始めた事である、

あとで何やらヒソ〳〵と長椅子の上で話り合つてる兩人に、お父さんに叱

られて如何んな氣がしたかと聞いたら、僕は五つでエフホーンは三つだなどとトンチンカンの返答をした後、エフホーンはピーナット（豌豆）を投けたのは私がわるいと云つた。ピーナットとは碁石の事を言つたのだらう。

なか〳〵可愛らしい事を言ふ。後悔したかと聞けば、ウン〳〵と無邪氣に頷き乍ら、まだ室の中に拾ひ殘つて居つたピーナットを二人で拾ひ集めては私の許へ持つて來た。

聞けば母なる人は上海で、麻疹か面瘍か何かの腫物から急に病死したとの事である。

エフホーンのお母樣は如何したかと聞けば、病院へ行つて毎日燒鳥やスープ許り食べて居つたが、急に天國へ行つて了つたとあどけない口調で答へた。

憐れな母である。憫れな子等である。さうして憐れなる父は此憫れなる子等をかくも嚴しく躾せねばならぬとは實にも憐れである。

自嘲記

この一片の日記を誌して意氣地のない日本海員の發奮を促す。

（一）

四月二十九日、午前零時十五分、苦しい荷役の濟むや濟まないのに、もう新嘉坡を出帆する。西洋人が Haste making life と歌つたのも無理はないと倩々身にしみて思ふ。

新嘉坡は士官泣かせのいやな所である。他所よりも特に使ひ惡い支那人を

使つて、他所よりも特に面倒な手續の多い荷物を、他所よりも特に多く（總計千五百噸も）積む所である。

錫塊の如く一箇（長さ一尺幅三寸厚三寸）八十圓も値するものを二百六十噸もとれば、ラバーのやうに一箱（容積一才）百五十圓も値するものを千箱も積んだりする。

かゝる特種の積荷は、やれ二重計算だとか、やれ積み場所の選定だとか云つて、かの『憐れなる椽の下の力持ち』にとつては興味も利益も義務もない、無意義な過勞をさせるに過ぎない厭なやつである。

自己のプロフエションに就てクドクドと不平や悲觀を並べるのは見つともない。男らしくない。エネルジックでないと笑ふ人がある。

不平は向上的精神の未だ喪はれざる反證である。コムプランとアフアイルダムールとは、赤き血汐の常に脈搏に鳴る青年の特有物である。不平と戀とを喪つた男は、酢と化つた酒と等しく、色の褪せた花と等しく、香のぬけた香水と等しく憐れなものである。白い毛が生えて目がかすむ老人と何等擇ぶ所がないと、くさす人がある。

どちらが本當だか其は知らぬ。併し私は、現在此船の上に居る私は少なからぬ不平を有つて居る。

鳥獸草木に至るまで凡て眠ると云ふ眞夜中の十二時頃からムクムクと起きて來て、何の刺戟も感興も趣味もない四時間の當直勤務なる者を船橋の上に過すと云ふ事は、少しく希望と憧憬と趣味とを懷抱する敏感の青年には堪へ

られぬ事である。

私は嘗て『白い髯の所有者』から、現代の青年たるものは須らく萬事默從主義なるべし、須らく『從順なる小羊』たれと敎へられた事がある。純理想主義の隨分『御目出たい叔父さん』から、太平洋の海商權を握るべく未來を激勵せられ祝福せられた事もある。

何も知らない感傷的な陸上の坊ちやん連中から、趣味性を充實しうる至極詩的な生活だと羨まれた事もある。

しかしどうやら皆『嘘の皮』であるらしく思はれる。又實際こうやつて商賣船の上に乘つて見ると、そんな事は實現せらるゝ樣子もなく、又其を期待し希望する根氣もなく、最後にそんな事を考へる暇さへない。

利口な現代の青年は、默從主義とか消極的奮鬪主義とか言ふものは、仁俠とか、犧牲とか、男伊達とか粹とか、意氣などゝ云ふ氣風の流行した時代の遺物で、其樣な贅澤な餘裕のある主義は今日の時代思潮とは到底相容れぬものなる事を知つてゐる。

又此等の怜悧な若者は、太平洋の海上權や印度洋の商權を握るのは資本家とか會社の重役とか云ふ偉い人種の事で、其日其日の生存が常に焦眉の問題として念頭を離るゝ事の出來ない彼等には、相關せざる事風馬牛なる事をも知つて居る。

又是等の若者は花は遠くから見て美しく、女はその聲を聽いて佳しく、海は陸から見て却つて詩的であると云ふ審美學の原則を忘れた陸の若き人々の

氣樂さを却つて羨ましがるものである。

航海術と運用術の應用に於て少なからず頭を勞らし、當直勤務に於て尠なからず神經衰弱となつて居る彼等を更に勞れしむべく更に神經衰弱たらしむべく待ち構えて居るやうに、入港する船を取り圍むで多くの荷物船が蝟集する所を、是等の暢氣な人々に見せてやりたいと彼等は思ふ。

（二）

燈臺とか立標とかやゝこしい航路標識物の澤山ある新嘉坡の西水道を無事通過した本船は、午前の十時に新寄港地マラッカに到着する。

徹宵徹夜不眠不休にて――丁度大病人の看護でもするやうな景氣で新嘉坡の荷役をすませた本船は、周章ふためいてバタ〳〵と艙口を閉すや否や出帆

したのであるが、又もや此地では無事入港するかしないのに、直ぐに又ばた〳〵、艙口を開けて荷役の準備にとりかゝる。

人間の理性が斯程までに蔑視せられ、人間の情欲が斯程までに閑却せられ、人間の越味性が斯程迄に虐げらるゝのを見るのは實に泣きたい程辛いものである。

腦精力は極端に忘れられ、筋精力は極端に疲弊するのが此生業である。わが頭腦に少しなりとも――ほんの少しなりとも自惚なり自信なりを持つて居るものは、潔よしとせない生業である。野心も努力も、奮闘も覇氣も、聰明も教慧も何も要らない生業である。ただ糞眞面目に會社の爲めに個性なき一のドライバーとつなて、平均一晝夜二十時間も手足を動かして居れば飯の食

ひ外れのない生業である。

入社したら大抵の間違ひがあつても、首の心配は無用なのは郵船會社の特徴であるそうな。如何に評判はよくても、如何に技術は拔群であつても、決して拔擢とか榮轉とか選拔とか云ふ奬勵制度の存在しないのが老會社「郵船」の特徴である。たゞ年功の廉を以て凡庸の才が席次も報酬も上位に居るのが其會社の特徴である。

境遇は人を馴致するもので、かゝる無刺激な枯淡な數學的な、粘液質な社是の下に働く者も、又かの去勢せられた驢馬の如く、無氣力にして眞面目な『ドライバー』氣質を具有するやうになるのは當然の結果と云はねばならぬ。

かゝる忠實にして温順なる社員のある限り、お家は萬代不易である。かの

英國人の行ふやうな聰明なる同盟罷業などは到底起り得べきものではない。

由來日本人と云ふ國民には、其素質から論じて、所謂インテレクチユアル・ストライキは出來ないさうである。

第一彼等には、親より子に繼ぎ、子より孫に亙つてゼネレイション・ツー・ゼネレイション的に、政府とか會社とか資本家とか云ふ强大なる勢力に對して、頑强にして合理的、活動的にして靜的な持久戰をやつて行くだけの氣魄とか根氣とか云ふものが缺乏して居る。

燃え易くして醒め易く、其間に何等の效果ある Kinetic energy の放散を見ないこと、かの消炭と異る所がないのが日本民族の特性である。憐むべき特

性である。一旦の小康に安んじて執拗なる努力を忍む國民である。

第二に彼等は從順なる事羊の如き民である。事無かれ主義の信仰者である。世に波風もなく曠日彌久、春日の如き苟合の下に暮すのが彼等の理想である。從つて彼等は善く云へば寡慾恬淡、至極思ひ切りの好い國民である。強い者とは喧嘩をするな、長い者には捲かれろ、泣く子と地頭には勝たれぬなどと云ふ觀念は、父母未生以前から彼等の脈胳を流れて居る。諦められないなどとブツ〳〵蔭では不平を溢し乍ら、強い重い者が上からグツと押へつければ、彈力なくヘナ〳〵と萎んで了ふ國民である。

よくやれ朝鮮人は事大主義だとか、やれ支那人は權勢に阿附する國民だなどと彼等は云ふ。併し夫子其人程 Might is right てふモットーを信ずる國民

は他にない事を忘れて居る。

就中船乘は、特にかゝる御目出たい國民性を、最も遺憾なく具有せるものである。

四ヶ月にも五ヶ月にも亘る長い航海に出かけて、朝から朝まで、(朝から晩までならば未だし……) 寢る暇もなく、休む時もなく、當直勤務と荷役との爲めに骨を粉にし肉を削つてまでも (世間に有りふれた暢氣極まる贅澤な形容詞とは全く違ふ意味の) 鞭たれ虐めらるゝ折には、全く心から無情を感じて、パッドルを發明したフルトンと云ふ男や、蒸氣の元祖ワットなどは磔殺にしても飽きたりなく思つたり、何故造物主は渾沌から海などを創造したのかなどと考へて見たり、ナポレオンでは無いが凡ての辭書と云ふ辭書から、

Bateau（船）と云ふ字を削り去りたいとまで思ふ。

斯程までに悲觀し失望せる彼等が、憔悴しきつた儘久し振に日本に歸つて來ると不思議な現象が此處に生ずる。僅か二週間か三週間の碇泊で彼等の心の創夷は綺麗に拭ひ去られてあともない。世の中に悲觀とか不平とか失望とか云ふ文字は一體存在してるものか……と云ふやうな面附きをして居る。喉元過ぐれば炎さを忘るとは實によく彼等の心理に適合せる言葉である。

是等の無氣力にして忘れつぽい、勞働者が自省し自發して『聰明なる罷業』など起し得べき筈がない。そは單に一の微々たる『海員救濟會』の事業の外は、何等の保護制度も意志發表機關も存在せず又存在の要求を彼等も進んで呼號せざるに見ても明かである。

職工に對しては不完全極まるものの乍らも『工場法案』なる者が出來た、併し『船員法案』とか『船舶法案』とか云ふものは嘗て一度も識者の唇に上つた事さえ聞かないのである。

茲に於てか現在の趨勢にて進めば、船乘は自ら救ふ能はず、又他よりも匡はれざる憐むべき民族であると云ふ結論に達する。

（三）

曾て神戸を出る時、或る男が其友に向つて、『今埠頭で人間と船乘とが喧嘩して居るのを見て來た』と語つて居たのを聞いた事がある。人間と船乘が面白い、如何にも皮肉である。夫れで思ひ出すのはトロイの戰爭である。

史家の談によればトロイの戰爭は人間藤の最初だと云ふ。さればにや、

此戰爭にはジユピター、バルカン、マース等の神樣方も出陣すれば、ヘクター、アキリウス、アジヤツク、ユーリシユス等の豪傑連も參加したのである。たゞ玆に譯の分らないのは、矢張り該戰に出馬したハーキユール、パーシユース、ジエイソン等の所謂英雄種族の階級である。

半神半人と史家は定義を下せど、固より頭は天に足は地にあるべき筈がない。何れは、神に近き偉人と云ふ意味で、凡人に優れて神的に、凡人に優れて精力的だつたと云ふに過ぎないであらう。

こゝで話は前に戻つて、『或る男』の云つた言葉を推論すると、『或る男』はその心の中に船乘をかゝる英雄種族に比較したのでないとすれば、即ちズツと下つて（船乘には氣の毒乍ら）彼等を野獸の群に引き入れやうとしたのであらう。

初めから私が云はうとして狙つたのは此處である。『或る男』の腹の中は如何であつたか、再びめぐり遇ふ迄は不可解であるが、とかく神話とかローマンスとか云ふ者が流行らぬ現代に生てゆく怜悧な男の事であるから、まさか二十世紀の今日神戸の棧橋で半人半神の偉人が古い數千年前の喧嘩の眞似を演じて居つたと云ふ意味では決して無かつたであらう。

とすれば問題は『3マイナス2卽ち1』である。昔より烏は常に黑く花は常に紅である。

今本船に日本の「救世軍」の士官が五六人乘つて居る。十年目毎に英國の本營で開催されるその宗教大會に出席する代表者であると云ふ。

此人達が最初船に乗つたとき、彼等の頭には、『船乗程道樂なものはなく、船乗程暢氣な放逸なものはなく、船乗程墮落したものはなく、船乗程非クリスチャン式でクリストの御手に救はれなければならないものはない』と云ふ考へが一杯だつたらしい。彼等もしかく自白して居る。そこで彼等は在船中の事業として先づ船乗を救濟すべしと考へて居つたかも知らん。彼等は、船乗は港について暇さへ有れば必ず上陸して怪しかる『港の女』に狎れ、惡酒に醉ひ、惡錢を賭るものであると一圖に思ひ詰めて居たらしい。

所が憐れなる船乗は、船が港へ着いても、金はいくらあつても、而して女や酒や賭博者が腕に撚をかけて陸に待つて居ても、遂に上陸するの暇を得ぬ程に荷役に忙しく當直勤務に勞れて居るのである。

之を見て彼の救世軍君はそは幸なりと云ふかも知らん。

船乗から云へば、天下是よりミゼラブルなものはない。彼等に云はすれば地獄に落ちてもかまはん、ただゆつくり遊ぶ暇と、心ゆく許り安眠する時間が欲しいのである。

安息と睡眠とに飢えたる生物それは『船方』である。土方馬方と共に『天下の三方』と稱せらるゝ尊きかくれたる努力者、船方よ!!汝は不眠と不休との間に機械の如く動いて、遂に神に近づかんとするのか、はた又野獣の群に落ちんとするか?!

三、スエズを渡りて

1. 寛の海ベンガル……一三〇
2. 南西季候風……一三六
3. コロンボより……一四一
4. 佛陀の齒……一五三
5. 亞剌北亞の色……一五八
6. 昼氣樓……一六四
7, スエズ運河……一七〇
8. クリート島……一七四
9. メソシナ海峽……一七九
10. コルシカ島……一八四
11. 歌精の話……一八八
12. 水松の城……一九三
13 マルセイユ……一九七
14. イベリヤを廻りて……二〇七
15. ジョンブルの島……二二七

魔の海ベンガル

一、雪嶺の峰高ければ、
　そこでベンガルは深いなり。
　怕ろしきまで深いとて、
　俺らの知つた事ぢやない。

二、ヒマラヤの峰皓ければ、
　そこでベンガルは碧いなり。
　物凄きまで碧いとて、
　俺らの知つた事ぢやない。

三、此洋上で死んだ人、
　此洋上で狂ふた人。
　數限りなくあらうけど、
　俺らの知つた事ぢやない。

四、碧い海から立つ陽炎の、
　なかで變化や怨靈が、
　アリヤリヤコラサと踊るとも、
　俺らの知つた事ぢやない。

五、深く澄みたる海底で、
　オイデ〳〵と死神の、

青白い手が招くとも、
俺らの知つた事ぢやない。

六、魔の海、死の海、呪咀の海、
などとさまでに怕いなら、
何故船になど乗つたのか?!……

と海の主は嘲りました。

雪嶺の雪、溶けて流れて恒川となり、恒川の水は流れて注いでベンガルの灣に入る。

怪異しきは魔の海ベンガルである。
雪嶺は高い山である、深い山である、清らかに不思議なる山である。

千古に亙つて解けざる雪の高峰である。
黎明の女神の光明は昔乍らに、二萬九千尺のエベレスト峰の上に輝いて居るであらう。

アーリヤ族の思想は之より生れ、吠陀の讃頌は之に向つて歌はれ、マハバラタの敍事詩は之に由つて育くまれ、釋迦の解脱は之に由つて暗示せらる。
偉なる雪嶺、尊き雪嶺。

魔の海ベンガルは此峰の下深く碧く澄んで居るのである。
恒川は長い川である、世にも巨きな不思議な川である。川神薩羅婆繪底の慈愛は此川を廣め、此川を深め、此川に幸ひして居る。因陀羅の神祕は此川をかざり、佛陀の法流は此江と共に流れ、アーリア族の文化は此河畔に成長

した。偉なる恒川、聖なる恒川。

魔の海ベンガルは此川の注ぐ所にある。

恐ろしくとも海である。船は通らなくてはならぬ。

郵船會社の古い船長に、ウィリアム某と云ふ英國人があつた。未だ一人身の事とて、スウキートホームとやらを有たざる氣樂さと、酒も煙草も嗜まざる禁欲主義とで、道樂とも云ふべき道樂はたゞ一つ、衣服道樂があるばかり一グロスに餘るホワイトシャツ、白の夏服の如きは五六十組を算へ、遺産調べをしたとき衣服だけで大トランクに五つ行李に三つあつたと云ふ。

此船長が歐洲からの歸りがけ、船が紅海からいよ〳〵印度洋へ出て、正にベンガルにさしかゝらうとするとき、室から、船橋から、そうして船から偶

然と見えなくなつた。時は十二時から四時の眞夜中であつた。遺言とてなければ是ぞと云ふ投身の原因も不明であるが、魔の海ベンガルの恐ろしい冥々の力は、深くこの好船長の鬱結せる心の裡に深く喰ひ入つて、たゞわけもなくフラ〳〵と死にたくさせたのだらうと私は考へる。

口差惡なきボーイ等は、平素好きな乾酪の爲めにとり逆上たのだらうなどと言ひ交した。『海の主』が聞いたら、馬鹿なッ——と笑ふであらう。

或る船の水夫は、新嘉坡を出帆して船がベンガルの灣心に出る頃から、怪しき言葉と怪しき振舞と怪しき心との所有者となつて春畵などを恭しく禮拜して居たが、何時の間にか深い碧いベンガルの波を分けて沈んで行つたと云ふ。

其他アイアングレイチングを脊負つて、死神の青白い手に誘はれて行つた火夫、熱帶の炎暑と、船中の無聊と、單一無刺激なる海上の景象と、さうして人の魂を削り心を腐らせる魔の海ベンガルの不思議なる感化力との爲めに遂に物狂はしくなつた某夫人、數へ來ればそんな例は十指に餘る。

一代の天才二葉亭四迷は此海上に逝き、わが二人の級友は、此海と波續きなる南印度洋の珊瑚の墓に葬られて居る。

實際此ベンガル灣は魔所である。此海を蔽ふ雲はたゞ氣味わるく鬱陶しく人の腦天に迫る。熱帶なれば勿論太陽は炎い。彼南からコロンボ迄六日間はたゞ斯かる太陽と海との世界である。何となく怖ろしく何となく底氣味わるく何となく人の心を苛々させる海である。

南西季候風

一年の中四月から十月まで約六ケ月間、紅海、印度洋、ベンガル灣、マラッカ海峡等に亙つて長く強く吹き荒るゝ一種の强風がある。船乗の間にサウウエスト、モンスーンと呼ばれて居るもの是である。

南西季候風は概して、十月——四月の北東貿易風に比して其連吹期間も長く風力が强暴で、かつ人に濕潤と憂鬱と快惱とを感得せしむる。だから船乗は四月から十月の交を、冬分の印度洋の航海だと云つて居る。此サウウエストの襲來する本場に三箇所ある。コロンボ埠頭と、ミニコイ燈臺附近と、ソコトラ島近海と。……

コロムボ埠頭のモンスーンの奮闘は實に物凄いもので、其偉大なる活力現象は同港の防波堤にぶつつかつて碎ける海嘯のやうな海の飛沫を見ても大抵想像はつくのである。『見に來い』の燈臺は、コロムボから正西三百哩の邊に散在せるラカディブ諸島とマルチブ群島との間に位置する一の小珊瑚礁の上に建てられてあつて、印度洋を往來する船乘りにとつてなくてならない目標である。『底虎』の島はコロムボから西北西へ千二百浬、阿弗利加ソマリランドのガーダーフ井ー岬の東北東二百五十海里許りの所にあるかなり巨きな島である。『見に來い』も『底虎』も共に其名の示す如く薄氣味わるい所として船乘から虎の如く怖がられて居る。

此不思議にして又一見怖ろしさうな難所に對して、初めから聊か位る負け

の氣味であつた僕は、漫然とこれは何でも出來るだけ畏怖黨の仲間を作るに限ると考へて、コロムボを出るや否やなるたけ怖ろしいと云ふ放果を與へさうな凄い文句を並べて、岩村男爵を始め二等客の略んど全部を威嚇して置いた。所が惡い事は出來ないもので、惡運拙く、『見に來い』は少し海化た許りで、『底虎』は近來にない凪であつたので、俄に元氣を恢復した例の畏怖黨から散々に油を搾られて、其から海上氣象に對する僕の信用は全く地に落て了つた。

かくして僕の威嚇はまさに一の白痴威嚇しとなつて、畏怖起念を誘發すると云ふ點に於て何等の奏效する所なく大に面目を損つたが、南西の季候風も又運わるくたゞ『空威張りに過ぎない』と見縊らるゝ氣の毒な破目に陷つて、

遂に其眞の素質を發揚するの機會を失つて了つた。

斯うなると人間程ぢう〳〵しい動物はないもので、今の今迄ビク〳〵もので渡つて居つた氷が案外に厚く大丈夫破れる虞がないとなると、何だ馬鹿らしい其れ騒げやれ踊れと、すつかり御目出度なつて了ふ。一舉手と雖も一投足と雖も到底生中を脱し得ぬ輩である。

輕佻なる人の心が極度に浮華に走るとき、嚴肅なる警告は遠く北方ナザレの聖地より來る。

海化に於て、失敗し侮られ嘲笑せられたる南西季候風は、さらばと許り罪々として、船人の嫌ひなく、日鼻口耳の遠慮なくサワラの砂を吹きつける。驕れる者よ猪口才なる者よ、少しは閉口せしやと云ふやうに吹きつける。

いゝ氣味である。

楊子江の流れは濁流滔々として三百浬の外に海を赤く染めるを以て有名である。併しアラビアの季候風は五百浬の外にサワラの熱砂を吹き送るを以て有名である。船窓から入つた砂が赤く汚く羅針盤の上にたまるのも此の時である。

紅海の航海は輕砂と熱風で苦めらると聞いて居つた。紅海ではなまじ、風のない方が涼しいと迄に噂される。何故ならば紅海で熱風に遇ふのは、丁度風呂の中で熱湯を掻き廻す樣なものであるからとの事である。

ナザレの飛砂は果して少からず船乘を惱ましたが風の方は常に涼しい北東風が吹いて居た爲めに、紅海の苦しい怖ろしい素質を働らずに通過したのは

印度洋上の南西季候風と共に大なる番狂はせで有つた。

コロンボより

上、バングル踊り

ハンドオルガンを持つた一人の男の子と、兩方の足に踝飾のやうな鈴をつけた娘との一組が碇泊の各船を訪れて、サロメともタンゴともつかぬ一種の舞踊を踊るのを、『バングル踊り』と云つたのは僕の擅斷である。

若しも或る人が其は僭越である、其樣な無鐵砲な擅斷は之を許さないときめつけるならば、僕は仕方がない、此珍らしい蠻踊を形容する爲に……頭に桃色のタバーンを戴いた、色の黑い十二三歳の男の子が彈奏する手洋琴のけ

つたいな響に連れて、松浦の佐世姫のやうな寬衣を身に纏ふた女の子が、朱色の唇から鼠のやうな白い齒を光らせ乍ら、黑い跣足の踝につけた多くの小さな鈴をジャラ〳〵と鳴らし乍ら、クルリ〳〵と廻つては踊り、踊つては歌ふところの不思議な踊であると言はう。

不思議な踊である。黑い細い營養不良質の腕を垂れた踊り娘は、輕く汚いスカートの裾をつまみ上げたまゝ、たゞ踝のバングルを鳴らす爲めにトン〳〵と足拍子をとり乍ら簡單にクルリ〳〵と廻つて行く。其白い眼にも低い鼻にも何等の感興も神來も勿論表情されて居らぬ。至極簡單な骨の折れない舞踊である。ツーステップスもスリーステップスもあつたものではない。

併し多年の練習と云ふものは恐ろしいもので、鈴の聚合聲が實によくハン

ドオルガンの節調や旋律に合ふので、彼等の顔に技巧的の表情がないだけに彼等の態度に衒氣がないだけに、彼等の樂聲と踊り振りに誇張的な所がないだけに、一種の愁思と哀感とが不測の間に觀衆の心裡に湧起するのである。されば歌唱一曲、舞踊一巡、踊り娘が膝行匍匐して喜捨の金を恭しく人に乞ふ時、意外の收穫があつたのも亦理あるかなと僕は思つた。

中、寶石商の目的

コロンボの寶石商が少しも商業上の道德觀念を懷抱せずして、正眞正銘立派なガラスの細片を、やれダイヤだとか、ルビーだとか、ムーンストーンだとか詐つて旅客を釣る事許り研究して居るのは、實に免すべからざる所業であるが、安んぞ知らんかゝる惡風習の起原の半は船客其人にあるのだとも

云へる。

世の中がせち辛くなつたにも拘はらず、趣味の上から見ても又は生活の必要意義から論じても、見得坊であり虚飾であると云ふ事が現代の要求でもあるまいが、此頃寶物の寶石具が盛んに歡迎されることは慥である。

この怪しからぬ風潮はコロンボの港まで押しよせて、爲に一打三圓や四圓のムーンストーンや一箇一圓や五十錢のルビーなどが盛んに紳士や淑女によつて求められるゝので、折角眞物の印度產の寶石を持つて來ても所謂玉石混淆で遂に振り向きもせられないと云ふのが、僞りならぬ今日のコロンボ寶石に就ての景況である。

從つて寶石商も安い寶石其ものを安價に商ひして薄利の營業をするのは終

局の目的ではなく、船内の明巣覘ひをして資本入らず駈引入らずの商賣をした方が得だと云ふ眞理を發明し又實行して居るのである。

斯くして私はマンマと時計を盗まれた。

下、時計を盗まる

鋭くカーテンの隙間から覗いた白い二つの眼は、倏忽として再び暗黒の中に消えて去る。暗黒の中に消え去つた二つの眼は、鹿島丸見習運轉士室前のアーリウエイで、更に他の二つて物凄い白い眸光を迎へて、四つの眼は互に或る重大なる意味を語るかのやうピカ〳〵と火花を散らす。

五月七日の眞夜中である。

廊下の小暗い電燈はボンヤリと、紅いタバーンと、血を嘗めたやうな朱

丹な唇と、氣味わるくテカ〳〵と光る油切つた漆黒の顔と、生白い巨きな眼とを照し出す。

獰猛な二人のヒンヅーである。

二人のヒンヅーは、やがて決斷したと云ふ見得で互に頷き合ひ乍ら、細長い足を一歩々々室へ踏み入れる。

尖頭の一人が、山かゞしのやうな細い手を机の上に伸ばしたとき、懐劍とも見ゆる光り物が黒い手中に閃いた。

危ない。

氣樂なのはこの室の二人の主人公である。みな荷役の監督へ行つて留守である。

黒い猿臂を鋭く引きこめたとき、手中の白い物はダッカーではなくて、此室の主人公の一人が香港で買つた、小さい可愛らしい置時計である事を發見した。

此置時計を断りもなく鷲掴みにしたとき、檳榔樹の葉で火のやうに赤く染められた二つの口がパッと開いて、鼠のやうに白い細い鋭い歯がニヤリと光る。

凱歌を奏した二人の掠奪者は意氣揚々と憐れなる此部屋から引き上げる。

さわぎは此から始まる。盗まれたのは拙者で御座る。

誰が發明して誰が承認したか知らぬが、此頃の二十世紀の新道徳觀念に由れば、凡て物を盗まれるのは其人に盗まれるだけの隙間があるので、他人に

欺されるのは其人に欺されるだけの缺點があるので、結局其人の不徳の致す所だとの事である。さうして一方盗む方は盗むだけの器量があるので、欺すのは欺すだけの才氣と智謀とを有つて居るので、天賦の才能を最も怜悧に最も正直に執行したものであるとの事だ。

斯くしてウ井リアム勝利王はハロルド王よりも有徳で、イヤゴーはオセロよりも怜悧で正直なのである。

斯くして世界一の大馬鹿者となり、世界一の大不徳者となつた私は、當夜午前三時まで錫蘭茶の積込みの監督や指揮に忙しく、時計どころの騒ぎでは無かつた。

しかし少許の休息を取るべく室へ歸つて來たとき、見慣れた時計が見慣れ

た机の上にないのを發見して、一種の寂し味を感ぜずには居られなんだ。

司厨長の話では前夜九時頃擧動不審な二人の土人の寶石商が迂路ついて居つたとの事である。

其から六時間過ぎた翌日の午前十時頃、Water police と云ふリボンを卷きつけて帽子を冠つて、チエック模様の肩掛とスカートとを着た跣足の黑い巡査が、舵取の案内によつて室へ訪れて來た。

室へ入るや何等の陳述も報告も聽取せない前に、先づ失敬と許り机の上の "Thriee eastles" を吸ひ出す。被害者の所でお先き煙草を吸ふのは彼等の豫定の一つであらう。

さも旨さうに煙を吹かしたのち、訊問に移つて、委細を聽いてからの言ひ

草が癪にさわる。此コロンボと云ふ所は有名な盜棒港である。何故夜中に戸を開けて置いたのか……、まあ兎も角も上陸してチーフ、インスペクターに告訴しろと云ふ。そんな暇があつたら船乘になるものか?!もう本船も直ぐ出帆だ、面倒臭いからどうでも好いと云つたら、それぢやインスペクター宛の手紙を書けと云ふ。

書いた手紙を持つて歸るときにも、此巡査殿には數本の煙草を辭りもせずポッケットへ入れてサンキューと云つた。煙草の所有者たる小川君が傍で見て居つたらさぞかし怒る事だらう。

以上の話を「古いヤドロス」に談したら、世の中に馬鹿なやつがあるもんだと云ふやうに大に笑はれた。第一盜られたのが不覺だと云ふ。第二に其を巡

査などに頼むのが更に不覺だと云ふ。煙草だけ損したのだと云ふ。そんな手紙など果して屑籠に這入るか海の中へ棄てゝ了ふか分るものかと憎らしげに笑つた。

噂に聞けば、新嘉坡、彼南、コロンボ等ヒンヅーやキリンや印度人の割據する海港では、かゝる風習が盛に流行するのであるが、就中コロンボは殊に劇しく、毎日各船にかゝる事件の一つや二つは絶間がないとの事である。巡査も巡査で又かと許りヨタを飛ばして煙にして了ふのである。怖ろしい所である。

併し之を、艀船の中で旅客を裸體にし、衣服や有金を一切身ぐるみ剝ぎ取つて陸へ追ひ上げる上海の風習や、（現に本船の三等船客に二人の被害者がある）灯の點いた蠟燭を植ゑた戸板を脊負ふて海濱を往來し、沖合の船を欺き寄せて暗礁に破壞せしむる駿河灣の住人に比すればまだまだ温順しい者だと諦めねばなるまい。

佛陀の齒

コロンボの名物は、例の佛陀の正覺入禪の靈場たるカンヂの古蹟と、兇暴音に鳴る南西季候風と、バングルの歌姫と、笆棒に安い寶石商とである。

カンヂへは遂に行く折がなかつたから、夫が如何に幽邃の境にして、如何に夫が傳説的宗教的色彩に富んで居るかは知る由もないが、カンヂにある佛陀の遺物の中で最も貴い『佛陀の齒』の事は、其繪葉書を賣つて居る商人から

面白い話を聞いた。

默つて聞いて居ると隨分亂暴な事を云ふ。この『佛陀の齒』を安置して居つた僧院は、異教徒ドラヴ井ダ族に襲撃せられたとき、敵の放けた劫火に對しても平氣であつたとか、ダンタブラの公主は靈夢によつて此尊い齒の所在を知つて始めてカンヂに奉祀したとか勝手な事を云ふ。

錫崙島史の誌す所に由ると、『佛陀の齒』Dathadhatu は紀元三百年代にシリメガヴンナ王の命に依つて、ダンタブラの公主が始めて公にカンディの一寺院に奉祀したに始まると云ふ。『佛陀の齒』が果して悉多太子の遺齒であるとして、さて其齒は太子が涅槃の醇境に達せんとして錫崙に精勵せるとき、何かの拍子で脫落せるものであるか、又は釋迦が菩提樹下に入寂せる後、佛

道布教、覺者崇拜等の好對象として各地に分配せられた佛陀の遺骨及び菩提樹の枝と共に錫崙に傳はつたのかは何等史上の誌す所がない。恐らく後者の說が正しいのであらう。

『佛陀の齒』が如何なる正覺や感得や妙見を佛教徒の心に神來せしめたかは知らぬが、此齒の在る所常に兵亂や危惧や擾亂が多く、其奇蹟的大偉力も兇暴な異教徒の前には零であつた事は、史上に誌さるゝ事實で、氣の毒な程轗軻不遇に難儀せられた事は、彼のエミリトルキーの爲めに其聖地パレスチンを蹂躪せられたキリスト教のホーリー、クロスと等しく其揆を一にして居る。

『佛陀の齒』が其漂泊流浪の旅の第一歩に上つたのは、井ツカマバフ王（千

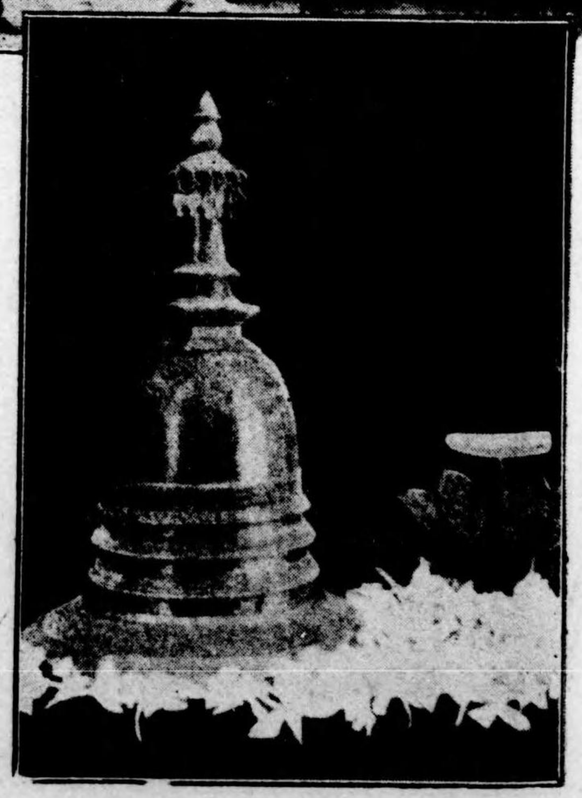
百八十年頃）の虐遇により、多くの僧侶に奉ぜられて、『佛陀の鉢』と共にカンディからロハナに移つたのに始まる。

『佛陀の齒』が蒙つた第一の凌辱は、セイロンを襲つたバーンドヤ族によつて、他の戰利品と共にマヅラに運ばれた事である。

斯くして奪はれた『齒』も又どうかして取り返されたと見え、セイロン島王は『齒』を奉じてこの野蠻なる侵入者の劍戟から難を遠く山中に避けたと記錄に書かれてある。

斯くして有爲轉變の儚なき流散の記錄を殘した『佛陀の齒』は、遂に異教徒たるポルトガル人から最後の凌辱を受けるまでに其の價値を下落したのである。

佛徒の聖地ダゴバ



佛陀の齒

即ち一五六〇年に、タミル王國の首府ジアフナ陥づて、佛教徒の最も尊崇する『佛陀の齒』は遂にホルトガル人に奪ひ去られた、そこでペグ王と云ふのが大に慨いて、金貨四十萬個を以て之を代償せんと乞ふた。されど此殉教的嘆願も兇暴なるホルトガル人に聞かれず、却つて『齒』はゴアの大僧正ドムガスバルによつて粉々にせられ、火に燒かれ、灰にせられ、河に投棄せられて了つた。併し一説には燒かれたのは模造物で眞物は土中に埋められてあつたと云ふ。

斯やうな面白い歴史のある『齒』の繪葉書だから是非買へと商人は僕に勧めて已まない。買ひ上げて繪で拜見した齒は、たとへ土中に埋められた眞物が現れて來たにもせよ、どうやら『佛陀の齒』ではないらしい。

繪葉書には立派な聖鉢と共に綺麗な入れ物の中に盛られた牙のやうな長い白い歯が見ゆるのみである。

佛教の開祖たる佛陀は固より大の菜食者であらねばならぬ。然らば羊蹄類の如く大根や菜葉をのみ食つて居る者の顎に、こんな鋭い長い細い鼠のやうな歯が出來る道理がない。どうして、もこいつは贄物に違ひない、肉許り食ひつけて居る動物が所有したものに違ひなからうと考へた。嘘だと思ふなら、とくと其寫眞を見るがよい。

亞刺比亞の色

どんな物に對してもとやかくと理窟をつけたがる西洋人の說によると、紅い色は熱情を具象し、青い色は冷靜を、黃色は嫉妬を、白は醇潔を、夫々に象徵すると云ふ。

さらば此亞刺比亞の天地を茫乎としてたゞ一色に彩る土器色は何を意味するであらう?、未だ西洋人の答は聞かないけれど、僕は直覺的に此色は横着な色である、不得要領な色である、圖迂々々しい色であると宣告するに躊躇しない。

横着にも常に葉かげに隱れてペロリ〳〵と長い舌を出しては、居ながらにして蠅を捕る蟲に七面蜥蜴なるものがある。此奴が好んで其變身術に用ふる色がこの土器色である。

世の中に、ある時は智者の如く或時は昧者の如く、覺れるが如く迷へるが

如く、無慾の如く執着する如く、覺めたるが如く居眠れるが如く、結局茫乎として何が何やら捕捉し難き人物がある。かゝる人は土器色の人である。

智に働けば惡まれる。情に溺るれば笑はれる。とかく世渡りは六づかしい……と覺つたとき旗幟不鮮明と云ふ字が生ずる。筒井の順慶と云ふ武士が產れる。土器色と云ふ横着な色、不得要領な色、狡猾な色が出來る。

綺麗な色にはとかく人が目を着ける。金角灣の美を有する土耳其は斯くして一歩々々衰滅に近づき、チベル河の秀を有する伊太利は昔から政爭鬪伐の絶間がない。

何でも汚い色に限る、何でも殺風景な倦怠と死と休止との色に限る、斯う云ふ圖迂々々しい色の皮の下に隱れて、悧巧な亞剌比亞は萬代不易と狡猾く

納まり返つて居るのであらう。

今現に本船が靜かに通過しつゝあるスエズ運河の兩岸を、靜かに匐ふやうに動いて居る駱駝と亞剌比亞人とは、此横着にして不得要領な土器色から生れた二種の動物を具象して居るのである。

急いでも熱風から脫れる事は出來ない、焦つても土器色の反射地熱から免れる事は出來ない。然らば、成るべく汗の出ないやうに、成るべく胃の折れないやうにと、懶げに長い頸を振り乍ら、ダブ〳〵と例の肉の瘤を搖り乍らのらりくらりと歩く駱駝はまさに横着な土器色の產物である。

白い衣服を着てはたゞ徒に眩しい。紅いものを着てはたゞ徒に暑苦しい。さらばと許り青い物を着ても、土器色の海の中では格別に凉しくもなく、紫、

黄、緑何れの色の下にかくれても炎暑の思ひは同じである。所詮は、此怖ろしい土器色の反射地熱に順應し調和して行く色はないものと見ゆる。かくて凡ての色を捨てたとき黒なる色が殘される。渾沌と暗黒と沈默の色が殘される。黒は一切を含み一切を蔽ひ一切を壓服する色である。凡ての色を試み盡してしかも失敗し盡した亞刺比亞人は、或は覺り或は拗ねて、この不得要領な暗い、渾沌と沈默の色の下にかくれ去つたのである。貧しい土器色に世を忍ぶ亞刺比亞の天地に適當したる好箇の産物である。

往昔名の賣れた親分になる爲には、夏でも褞袍を被り火鉢を擁して、猶凉しい〳〵と云はなければならなかつたさうである。此アラビア人を其當時に連れて行つたら、至極度胸のいゝ男伊達となつたであらう。無智と稚氣との

世界に名を揚げやうとするにはかゝる非合理的な努力も要る。併しアラビア人は凡ての努力と經驗とを超越して、始めて此尊い色に達した。趣味から來たのでもなく、冗談や好奇や稚氣や衒氣などから來たのでもなく、眞劍に生の必要意義から來たのである。

炎暑い太陽と、ヌーボー式の土器色との間に生息する爲には是非とも此不得要領な黒い色でなくてはならないのだ。『不自然な自然』とはこの事であらう。

そこで駱駝は出來るだけ閑々と匐行し、そこでアラビア人は黒い暗黒の衣服の下にかくれつゝ熱風に吹かれて居るのである。

蜃氣樓

丁君。五月十八日午後二時、紅海からまさにスエズ灣に這入らうとして、私は油のやうに靜かな海の上に現れた蜃氣樓を當直の船橋から眺めて、世の中に空中樓閣を城くと云ふ言葉の存在するのを成程と首肯しました。

然るにこゝに面白いのは、痴人の想像に生るゝ蜃氣樓は、如何にも合理的に如何にも可能的に現實性を有する如く堂々と城かるゝに反し、實際今私の眼の前に實現して居る蜃氣樓の本體は、却つてかの玉手箱の煙の如く、怪蛤の氣の如く、頗る神秘的な頗る荒誕無稽なものであります。

先づ初め遠に遠く第一の水平線上に、樺色かとも見ゆる細い棒のやうなものがニョッキリと突つ立つて、其さきから夢のやうに薄い煙を吐いて居ります。

斯う云ふやうに空は飽くまで晴れ海は飽くまで靜かで、夥しい陽炎の編が肉眼にも見ゆるやうに海一面から騰つて居る時は、必ず第一と第二の二つの水平線が出來ます。そうして遠い第一の水平線と近い第二の水平線との間は紗をかけたやうに白くわる光りする霞の海となります。

此海ではかゝる奇なる現象の珍らしくもないと云ふ事を豫て聞いて居りました私は、何處かの煙突でも映つたのであらうと思ひました。所が其煙突がやがて本船に向つて動いて參るではありませんか?!ノコ〳〵とやつて來た煙突のお化が、例の白い霞の海に入ると忽然として其處に第二の奇現象が生じ

ました。即ち今まで繪や寫眞で見たと寸分違はぬ西洋の城塔が、巍然として私の雙眼鏡の中に聳えて居るのであります。

鼠色の圓い縞が澤山ある煉瓦造りの細長い四つの櫓に擁られて、中央に一つの城があるのです。そうして其櫓の上から一つの煙突が小さく覗いて矢張り煙りを吐いて居るのです。

餘りに人を馬鹿にした神通不可測の變化に、初めはたゞ面白がつてゐた私が、ソロ〳〵不安と怖ろしさとを味はふべく進んだとき、第三の現象が起りました。今まではたゞ單に一つの城であつたのが今度は其頂點と頂點とを反對に繼ぎ合して、しかも上下に全く相似的で有るお化の城がユラリ〳〵と波に流れて近づいて參ります。好奇的欲求の滿足と畏怖起念の衝動との爲め私

の心理は一方ならぬ混亂を起しました。

此奇物が第二の水平線の上に現れたとき、第四の現象として如何なる變化が起つたかと云ふに、私は飽までアイロニーな造化の戯れ——其は造物主の有する素質の一半面たる諧謔性の表示たる——の巧妙なるに感心せずには居られません。即ち第二の水平線に現れたものは、船で有りました。二本の樺色のマストと一本の黑色の煙突と鼠色のデッキハウスとを有つた舷側の少し高い現實の船で有りました。

あなたは何故斯んな荒涼たるアラビアの砂漠の中に豫言者モーゼは生れたか　又何故こんな熱砂と熱風と倦怠と土器色との間に哲人基督は現れたか〜と考へられた事は有りませんか？。

由來太古蒙昧の世の中で、醇にして粗なる人の心を結束して、信と愛と敬虔との道を歩ませやうと試みるに當つては、是等の人々をして強く印象せしむる或る一種の具體的の權威が要るのであります。

モーゼの用ひた豫言と、日蓮や基督の用ひた奇蹟は是であります。

越中越後佐渡などでその宗教的奇蹟を示した日蓮が魚津の蜃氣樓を利用したやうに、蜃氣樓の名所である紅海の岸にモーゼは生れ基督は成效したのであります。

波へ字を書く日蓮と、波の上を渡る基督と!! 何とよく似た同巧異曲の技巧ではありませんか?!

たゞこゝに氣の毒なのは豫言者モーゼであります。モーゼは一日へブライ

亞剌比亞の色

エスプ[illegible]ツ銅像　ナイル河畔

人を集めて或る重大なる豫言をした後、わが豫言力の效果あるものであることを眼のあたり彼等に覺らしむる爲めに、突然死乃山に向つて、

『山よ來れ……吾汝と語るべし』

とか何とか云つたさうであります。

所が蜃氣樓と雖も人間の作るものでない以上、そうモーゼの言ふ通り間に合せに現はれるものではありません。

結果は殘酷と滑稽であります。山は動いて來ません。

しかしそこは老獪なるモーゼの事ですから、『ヨシ〳〵山が來なければ仕方がない、俺の方から行かう』とスタ〳〵死乃山へ登つて行つたそうであります。面白い話ではありませんか?!

スエズ運河

人間が其貧しい腦漿を搾り、其弱い力を恃んで、不遜にも其けちな淺墓な技巧を大自然の大配律の上に試みた企ては可成多い。ジエイソンの遠征は是である。ハアキユールズの冒險も是である。ピサの斜塔もワツトのエンジンも、ライトの飛行機も、萬里の長城も皆是である。ナポレオン一世のモスコー遠征は失敗せる技巧の好例である。

ハイネの詩賦と、ワグネルの音樂と、ラフアエル、ターナーの繪畫と共に少しく成功せる技巧の一として、私は玆に、今本船が正に通過しつゝあるスエズ運河を數へやうと思ふ。

十數年の星霜とレセツプスを始め幾多の英物の莫大なる腦精力の消費と、數億圓に餘る巨額の投資とに由つて具象化せられたる者が、全長八十五哩、水深三十一呎、水面最大河幅三百三十呎、水底河幅百十八呎の、このスエズの運河である。

此小さな河の畔に、モーゼは豫言し、モハメットは布敎し、ラメス王は金字塔を建て、奈翁は鞍壺を叩いたのである。

此河の畔が埃及文明とセム族文明との混一點であつたのである。

紅海からスエズ灣に入り、スエズ灣から右舷にイブラヒムの町を眺め乍ら此運河に入り込んだ人々はかぞへ切れない程ある。是等の人々に對して、今迄想像して居つた奇的欲求と、眼前に展開する實在とが如何に奇しき差違